

第三章 囃子（シャギリ）

第一節 囃子の経緯

囃子は長浜曳山祭の曳山の曳行中や狂言執行の前後・裸参り・起し太鼓などで演奏される芸能である。長浜では囃子をシャギリとよぶことが多い。楽器は笛・大太鼓・締め太鼓・すり鉦で、人数は五人程度から二〇人を超える大所帯になることもある。シャギリは長浜曳山祭だけでなく、長浜市でおこなわれるイベントや結婚式・郷土芸能の披露の場などでも演奏されることがあり長浜を代表する芸能の一つである。

第一節では、シャギリが曳山祭を執行する山組においてどのように伝承されてきたのかを見ていく。

山組においてシャギリの伝承のあり方は昭和四六年（一九七一）長浜曳山祭囃子保存会（以下囃子保存会）の発足を契機に大きくかわった。昭和四〇年代初頭までは、大半の山組では近郊農村から囃子方と呼ばれるシャギリを演奏する人を雇い、シャギリをしていた。しかし昭和四〇年頃から近郊農村では農家の兼業化や田植え時期の早期化などの要因によりシャギリに行く時間がなくなってきた。山組でも囃子方を雇う金銭的負担を減らしたいと考えるようになり、テープやシャギリを伝承する山組・チンドン屋などにシャギリの演奏を頼むようになる。そして囃子保存会の発足後、若い衆や子どもを中心にシャギリを習うよ

うになり、その後各山組で伝承され現在に至る。

一方で囃子保存会発足以前からシャギリを伝承していた山組もある。月宮殿（田町組）・青海山（北町組）・高砂山（宮町組）・猩々丸（船町組）・萬歳樓（瀬田町組）である。月宮殿・猩々丸は戦前に山組で伝承していた曲を戦後に復活させている。萬歳樓も戦前に伝承していた曲があつたが、戦中に途絶えてしまい、戦後、高砂山とともに近郊農村からシャギリを習った。さらに青海山は昭和三八年から三、四年間活動した長浜祭囃子保存会（前述の囃子保存会とは別組織）が指導した曲を現在でも伝承している。

囃子保存会が普及させた曲は、高砂山のS氏が長浜市四ツ塚（旧長浜市）で習い楽譜化したものである。以下に①囃子保存会発足の経緯、②囃子保存会の曲を伝承する山組など、③独自の曲を伝承する山組、④囃子保存会の曲と独自の曲を伝承する山組に分けて、長浜曳山祭のシャギリの経緯を見ていきたい。なお、昭和四〇年代までの近郊農村での詳細な伝承については、論考編の「長浜曳山祭と周辺村落―長浜曳山祭囃子保存会以前のシャギリを中心に―」に記載している。

第一項 長浜曳山祭囃子保存会発足の経緯

ここでは、囃子保存会の曲を採譜した二代目会長S氏の歩みを中心に、保存会が発足する経緯を紹介する。

昭和三〇年代初頭、S氏は個人的な興味から四ツ塚の囃子方からシャギリを習得し、シャギリを五線譜化する。その後、所属する高砂山や長浜市立西中学校において指導を始める。昭和四〇年代中頃、各山組

が近郊農村からの囃子方の確保が難しくなるなか、囃子保存会発足の中心人物として、自身が習得したシャガリを各山組に指導するようになる。

二代目会長がシャガリを習得するまで 高砂山に所属するS氏が山組の若い衆に加入した昭和二九年頃、自町で囃子方の後継者は養成していなかった。高砂山では、戦前から「起し太鼓」以外の曲は雇いシャガリによって演奏されていて、戦後は四ツ塚に専属でシャガリを頼んでいた。雇いシャガリをしていた当時、町の人々はお酒を持参してお願いにいき手間賃を払えばシャガリに来てくれるという感覚だった。また、近郊では狂言見たさにシャガリを習う人もいた。

S氏は彦根市でバンドを組んでいたこともあり、もともと音楽の素養があった。昭和二〇年代末、S氏は初めてシャガリを聴き、感銘を受け、興味を持った。そこで高砂山と萬歳樓の若い衆一三人で四ツ塚にシャガリを習うことにした。四ツ塚では譜面がなく、「ウー・ヒョーロウヒョー」などとうたい、口伝で教えていた。そこで四ツ塚のシャガリのリーダーに口伝えの旋律を「ウー・ヒョー」で書いてもらった。毎日旋律を「ウー・ヒョーロウヒョー」といつて練習し、頭に入れたら笛が吹けるようになるというのが、四ツ塚のリーダーの方針だったが、なかなか笛を持たせないで、皆飽きて辞めていった。残ったのはS氏を含め高砂山の二人だった。太鼓はなかなか教えてもらえなかった。四ツ塚の太鼓の人に頼むと、「(太鼓を)なめたらあかん」と怒られた。「人が五年かかるなら、三か月、いや一か月で覚える」と食い下がり、教えてもらうことになった。実際に太鼓を叩いて練習させず、座布団を叩かせてバチの位置を教えた。そ

れを譜面に書き、自分なりに覚えた。「今思うとようやくたな」とS氏はいう。当時はまだ保存会を結成する意識はなかった。

五線譜に採譜する 昭和三七年に東京の県人会に呼ばれて三越劇場と九段会館で狂言の東京公演を上演した。そのときシャガリも演奏した。シャガリを聞いて観客が喜んだり、湖北を懐かしがったりするのを見て、シャガリを残さなくてはいけないと思った。これが譜面化する大きなきっかけとなった。太鼓は自分なりに譜面化していたが、笛も譜面化しようと思い、「ウー・ヒョー」と書かれたメモを五線譜に置き換えた。三九年には「御遣り」と「神楽」の楽譜ができた。**西中のシャガリ演奏** 昭和三九年頃、S氏は長浜市立西中学校の音楽のY先生から、シャガリをブラスバンドでできないかと相談された。ピアノで音を探ってみたが、うまくいかない。そこで変調して、スペリオパイプ(リコーダー)で吹けるように五線譜を作った。その楽譜をもとに、ブラスバンド部の中学一年生を夏休み一か月指導した。そして、市民会館ができたとき(昭和四〇年)に初めて発表した。その後、授業などに発展し、運動会でも演奏されるようになった。またほかの学校でも演奏するようになり、多くの子どもが祭りに関心を持つようになった。

京都交響楽団での演奏 昭和四〇年頃、外山雄三氏に譜面を渡し、その編曲・指揮で翌年京都交響楽団のオーケストラで演奏された。

ほかのシャガリ伝承の動き 昭和三七、三八年頃に猩々丸の尺八の先生が猩々丸と月宮殿の曲を混合させて作曲したシャガリを広めようと、シャガリの練習参加者を公募した。しかし、猩々丸と月宮殿を混ぜたようなシャガリが敬遠されたのか、集まった人は少なかった。

結局青海山だけが残った。今でも青海山に残る「豊公楽」・「太平楽」はそのときに習った曲である。（青海山の項で詳細を記載）

S氏独自の普及活動 囃子保存会ができる前、昭和四五年の祭りが終わってからS氏は宮町会館や公民館などで月に二回くらい、高砂山・諫鼓山（御堂前組）などの若い衆などにシャガリを教え始めた。「御遣り」・「神楽」・「戻り山」の順に教えた。

このあと諫鼓山は若い衆らが自町でシャガリをできるようにと、以前からS氏らにシャガリを習っていた若い衆数名を中心にシャガリを練習し始めた。

山組を越えたシャガリの応援 囃子保存会ができる以前からシャガリができる人や山組が、ほかの山組にシャガリの応援に行っていた。昭和三〇年代に早くも猩々丸は孔雀山に応援に行き、昭和四二年には青海山が壽山に、昭和四〇年代前半中頃には月宮殿が翁山などに、萬歳樓が鳳凰山などに、そして昭和四六年にはS氏やS氏が教えた諫鼓山の若い衆らが常磐山に応援に行っている。

囃子保存会設立の経緯 S氏によれば、シャガリの保存で月宮殿囃子方のM氏（のちの囃子保存会初代会長）から相談を受けた高砂山出身の市議会議員が、市の助成を受けるためには、各山組の囃子方が集まった保存会が必要と、強く促したことが結成のきっかけとなった。M氏から同じく高砂山のS氏に話がいき、さらに四ツ塚の兄弟弟子関係である萬歳樓にも話がいった。高砂山では、自町ではなくほかの山組に先に話を持ちかけた市議の動きを非難する声や、結成できても「すぐに分裂する」と危惧する声が出たという。ちょうどその頃、雇いシャガリが戻り山前に帰ってしまったり、近郊からの

囃子方が揃わないという理由から、祭りではテープレコーダーからスピーカーでシャガリを流すことにしたが、音が途切れたり、曲を間違えたり、タイミング良く音が出せなかったりと無茶苦茶だった。この結果、シャガリは生演奏でないといけないという気運が高まっていた。

昭和四六年五月に山組でシャガリを伝承している月宮殿・青海山・高砂山・萬歳樓で保存会を結成し、後継者育成の目的で市役所から助成金が下りた。

当初出番山が保存会に囃子方を頼んで、御礼を出す仕組みにすれば、近郊の囃子方に頼みにいかなくともよくなると期待された。しかし、萬歳樓から、シャガリを練習するのは自分の山組のためで、ほかの山組のためではない、などの不満の声が上がり、結成二年目に萬歳樓が保存会を脱退する恐れが生じ、保存会が破綻する危機となった。せっかく活動し始め、市の助成も受けている保存会を存続させるため、S氏は毎日のように萬歳樓に説得にいった。ようやく萬歳樓の囃子方もほかの山組に出てもよいとなった。萬歳樓は翌五〇年には諫鼓山でシャガリをしている。

S氏は保存会結成当初から、各山組で子どもを中心としてシャガリの伝承させるつもりだったが、この破綻の危機を契機に、さらにその思いを強くした。しかし、「奉演間」など譜面化できていない曲があり準備が難航した。その間はシャガリができる山組が、できない山組を応援するというで時間をつなごうとした。一方でS氏は一人であちこちの町の若い衆に教えにいき続けた。

子どものシャガリへの参加 昭和四九年、S氏が会長になり、S氏

が五線譜化した楽譜をもとに、シャガリを伝承していない山組への指導を始め、子どもを公募し始めた。各山組からたくさんの子どもと世話役の大人が参加した。世話役は山組で決められたというよりは自ら名乗った人が多かった。昭和四十九年頃、春日山（本町組）・猩々丸・孔雀山（神戸組）・常磐山（呉服町組）を除く八つの山組が保存会に加入した。五二年には、一二の山組がすべて参加した。猩々丸は当初自分の山でシャガリをまかなえるので入る必要がないとしていたが、五二年に参加となった。練習は、各山組でおこない、ここに保存会から指導に行く形態を採った。民家の二階で練習をしたこともあった。

保存会で四八年頃に小松（石川県）に行ったときに、通常は七ツ穴の獅子舞の笛を、六ツ穴で吹きやすくしていたことからヒントを得て、七ツ穴の子ども用の笛を導入した。昔の笛は大人用で中学生以上しか吹けなかったが、子ども用の笛にしてから、小学生でも音が出るようになった。一期生の子どもたちが教材用のシャガリを録音し、そのレコードが基本となった。

昭和四十九年、翁山（伊部町組）で壽山（大手町組）の子どもの囃子方を初めて曳山に上げた。当初、子どもであることを黙っていて、最後にシャガリが子どもであることを知らせると、みんな驚いた。子どもでは無理といわれていたが、この件で自信をつけ、その後、壽山や、鳳凰山（祝町組）、諫鼓山なども子どもを曳山に上げるようになった。また、当時は近郊農村からの囃子方の確保が大変難しくなっており、子どもの囃子方への参加は必要性を増していた。

シャガリの出演機会を増やす 昭和五一年、祭りだけでは寂しいの

で、夕渡りのパレード（先導隊）や裸参りの迎えシャガリなどの出演機会を増やした。そのうちに大阪など市外での出演機会が増えた。**全山組の加入** 昭和五三年、孔雀山が加入し、最後まで加入していなかった猩々丸が、S氏が猩々丸の曲を五線譜で書くという条件つきで囃子保存会に加入した。

楽譜の刊行 昭和五四年には猩々丸の採譜が完成し、萬歳樓を除く全曲を五線譜化した楽譜を刊行する。

ほかの山組への応援体制の強化 昭和五四年、祭りの本日が全山出場となり誰がどの山組に応援に行くか、ローテーションを決めておこなった。囃子方だといえば、ほかの山組にも上げてくれた。当時は既にテープでシャガリをおこなってはいなかったが、出番山は狂言に人員が割かれシャガリが手薄になるため、あちこちで引く手あまただった。

その後、現在まで囃子保存会が調整して出番山へ暇番山がシャガリの応援をしている。全山が出場するときは囃子方が足りなくなり、複数の山組を掛け持ちすることもあった。なお、曲の違う山組がシャガリの応援に行くこともある。

宣伝パレード 昭和五四年から数年間シャガリキャラバン隊を組んで、当時の長浜市内を一巡して、祭りと子ども集めの宣伝パレードをおこなった。また介護施設に行ってお年寄りに演奏を披露した。

各種イベントなどへの参加 民俗芸能大会・ロータリークラブ・全国滋賀県人会総会・昭和五五年サントリー地域文化賞での記念演奏・昭和五六年滋賀国体・昭和五八年大阪城四〇〇年祭での演奏などもおこなった。昭和五五年前後のスケジュールは大変過密だった。ま

た、よそからの視察も多かった。また昭和五四年には市内の業者から二〇〇ずつパンツと草履の寄贈も受け、それを着て各種イベントに出演していた。

長浜曳山祭が国指定を受けて、昭和五四年から五八年まで全山組が曳山祭に出場した。子どもたちには出演の度ごとにごちそうを食べさせた。そうするなかで子どもが友達を誘い合うように仕向けた。

女子の参加 長浜市立西中学校の校長に、子どもをシャギリに参加させるために学校を休ませてほしいと頼みにいくと、男子のみ休ませるわけにはいかない、このままでは男子も休ませられなくなるといわれた。この件を總當番に相談し、夕渡りに付加した先導隊のパレードなら女子の参加もよいと許可された。そして昭和五四年、一二基揃った年から女子も参加させた。このとき、S氏や現会長のT氏が調整に当たったが、一部山組から「保存会をやめる」、「女子を入れるなんて何すんねん」といわれるほど揉めた。

山組独自の曲の継続 一時は、山組独自の曲を伝承する山組へも保存会の曲を吹くよう依頼したことがあったが、やはり自分たちの山組のシャギリを伝えなければならぬと、方向修正した。月宮殿・狸丸・萬歳樓・青海山は独自のシャギリをし、保存会の譜面は強制していない。曲のない所は保存会の譜面を使えばよいということになった。発表会でも、保存会のシャギリと自分の山組のシャギリを交互で演奏するなどしている。

教材用CDの作り直し 保存会で、五線譜の保存会のシャギリと、萬歳樓・月宮殿・狸丸のものを加えたCDを作り直した。

第二項 長浜曳山祭囃子保存会の曲を伝承する山組など

囃子保存会の曲を伝承するのは、八つの山組（春日山・諫鼓山・高砂山・壽山・常磐山・鳳凰山・翁山・孔雀山）と豊国神社のゑびす囃子である。八つの山組の多くは戦前から保存会が結成する昭和四六年前後まで近郊農村から囃子方を雇っていた。ただし、昭和四〇年前後から、近郊農村の農家の兼業化、田植えの早期化などにより、囃子方の確保が難しくなり、シャギリをテープで流したり、シャギリを伝承するほかの山組に頼むようになっていた。

各山組で伝承する曲は起し太鼓で演奏される「桜囃子」・「菊囃子」・「起し太鼓」などのみで、ほかは高砂山のS氏が五線譜化した曲である。

しかし、各山組によって現在に至る経緯は異なる。保存会の曲のもととなった高砂山は、昭和三〇年代既に近郊農村からシャギリを習い、山組で伝承し始めた。また孔雀山でも昭和三〇年代後半に山組でシャギリを練習していた。

囃子保存会発足後も、伝承の経緯には差がある。壽山と孔雀山は一時指導者が不在であったため伝承が断絶していた。

また、現在に至るまで多くの山組は出番山のときに男子が役者になり、囃子方が少なくなるため、囃子保存会が調整するなどして、暇番山の山組に応援してもらっている。

【春日山（本町組）】

春日山は囃子保存会への加入前にシャギリを伝承していなかった。近郊農村から雇いシャギリをしていたと考えられるが、当時を知る人がおらず、具体的なことはわからない。保存会加入後に子どもが中心

となってシャギリを伝承している。

囃子保存会への加入 春日山では昭和五〇年前後に男子中学生の一人が、囃子保存会が大通寺でおこなっていた囃子の練習に行くようになったが、ほかの人には広がらなかった。春日山が囃子保存会に入ったのは昭和五十一年か五十二年くらいである。それ以降は筆頭が中心に子どもを集めて練習をするようになった。

【諫鼓山（御堂前組）】

囃子保存会設立前は主に長浜市国友（旧長浜市）からシャギリを雇っていた。

囃子保存会設立後初めての出番山（昭和四七年）では、設立前に高砂山で教わった諫鼓山の若い衆の一人が国友の囃子方と一緒にシャギリを演奏した。次の出番山の昭和五〇年は萬歳樓に依頼して演奏してもらっている。その後は、山組内で子どもも含めてシャギリができる人が揃ってきたので諫鼓山だけでできるようになったが、不足する場合は、出番山の重ならない高砂山・萬歳樓の応援を得ていた。一方で高砂山・孔雀山などが出番山のときには応援にいつていた。近年は鳳凰山からの応援を得ている。

諫鼓山では昭和四〇年代まで、起し太鼓ではテープと太鼓・すり鉦・三味線で「桜囃子」を演奏していたが、昭和四七年の出番山の際に起し太鼓の生演奏ができるようにと、先に高砂山で習っていた若い衆が先生になってその年の二月から若い衆が楽譜で練習をし、「桜囃子」を演奏した。そのなかからシャギリを本格的に習う人が増えその後、子どもにも伝承している。

囃子保存会設立以前 諫鼓山の記録には、雇いシャギリとして明治

二〇年は長浜市三川（旧虎姫町）、大正一四年は長浜市湖北町小今（旧湖北町）、昭和八年は長浜市湖北町速水（旧湖北町）という地名が記されている。

戦後すぐには長浜市布勢（旧長浜市）や長浜市八幡中山（旧長浜市）から、その後は、国友の人が隣りの長浜市下の郷東（安福寺）（旧長浜市）の人と一緒にシャギリに来てくれていた。

シャギリに三味線が入る場面 起し太鼓のときだけ町内の風呂屋のおばさんが三味線をして賑やかに「桜囃子」を囃した。それ以外のシャギリでは三味線が入ることはない。また起し太鼓の歌もシャギリに合わせてうたった。今は、三味線は入れていないし、歌もうたわなくなった。自町でシャギリを覚える前の起し太鼓の笛はテープであったが、太鼓は若い衆で叩く人が数人いた。また、シャギリヤタイ（囃子屋台）のできる前は、乳母車やリヤカーに太鼓を載せて町内をまわった。三味線のかわりに若い衆がギターを弾くこともあった。

諫鼓山と国友が一緒にシャギリを演奏する 中老のN氏は五線譜で習うようになった大人の一期生である。大学生のとき（昭和四四年）にシャギリの募集案内を見て町内の同級生と二人で高砂山に習いにいき、宮町会館や個人の二階、長浜公民館などで習った。練習は基本的に楽譜に因ったが、微妙な指の押さえ方は見て習った。太鼓の叩き方の基本も習った。笛は五月から七月で「御遣り」と「神楽」が何とか鳴らせるようになったことを記憶している。

N氏が正式に若い衆に入る前（昭和四七年）の出番のときは国友の囃子方と一緒に笛を吹いた。このとき、国友からは四人来ていた。

太鼓一人・すり鉦一人・笛二人だった。笛が二人では少ないので、笛吹けるなら亭に上がれといわれて、亭で一一緒に笛を吹いた。

しかし、国友の人が「御遣り」というのは保存会という「神楽」で、彼らが「神楽」といつているのは保存会の「御遣り」だった。曲名が逆転していたのを覚えている。太鼓の叩き方も違っていった。保存会では「御遣り」で太太鼓を八つ叩くところが、国友では大太鼓を四つに締め太鼓を四つ叩く、つまり、ドンドンドンドンタンタンタンと叩くものだった。

女子の参加 昭和五〇年頃町内の女子中学生からシャギリが好きなので習いたいという依頼があったので教えたのが、長浜の山組で女性に教える最初となった。曳山祭への参加はしなかったが、夏に駅前通りであった「長浜総おどり」のオープニング先導隊のシャギリの一人として参加している。その後も希望者があれば、子どもから大人まで練習に参加している。

【高砂山（宮町組）】

昭和三〇年代前半に囃子保存会二代目会長（高砂山）らが四ツ塚にシャギリを習いにいくまで、高砂山は主に四ツ塚から雇いシャギリをしていた。自町でシャギリをするようになってからも昭和四〇年代までは近郊から雇いシャギリをしていた。当時は若い衆だけでシャギリをしていたため、出番山のときは狂言の執行に人手が割かれてしまい、シャギリにまで人員をまわせられなかった。また保存会が発足する以前はシャギリに子どもが関与していなかった。

昔のシャギリ 曳山祭は大名祭りのため、山組の人はシャギリに関心

がなかった。自分たちは紋付羽織袴で何もせず、シャギリは手間賃を払ったら来てもらえるくらいに考えていた。だからシャギリをする人がいなかった。

雇いシャギリ 高砂山は専属で四ツ塚から来てもらっていた。四ツ塚と一緒に本庄からも来ていた。

昭和三〇年代後半のシャギリの伝承 自町でシャギリを稽古していた。昭和三九年には自町の人も囃子方として祭りに出た。町内で吹ける人は五、六人だった。起し太鼓は簡単なので吹ける人はもっていた。当時は人数が足りなければ本庄の囃子方に来てもらっていた。仕事が終わってから夜だけ来る人が多かった。

起し太鼓 もともと高砂山の起し太鼓で演奏する「正調」という曲には三味線が入らなかった。もし三味線の入る「桜囃子」をするると長老から怒られた。昔は錦町に三軒くらい置屋があり、町内だからお酒を持っていくと芸者さんがただで来てくれた。昭和五〇年代にはまだ芸者さんがおり、三味線で一緒に起し太鼓をしていた。

昭和四〇年代の子どもの関与 囃子保存会加入以前、子どもは稽古をしていなかった。

【壽山（大手町組）】

囃子保存会に加入する前は、近郊農村から囃子方を雇っていたが、昭和三〇年代から囃子方が集まりにくくなっていった。テープでシャギリを流したこともあったが評判が悪かった。昭和四六年頃保存会に加入し、昭和四九年には曳山祭で初めて子どもが演奏した（翁山参照）。しかし昭和五三年頃後継者不足により伝承は途絶える。数年後孔雀山

と合同で練習するも、指導者が亡くなったため平成初頭に再度傳承しなくなった。平成一六年に常磐山と合同で練習するかたちでシャギリを再開していたが、現在では壽山だけで練習している。

雇いシャギリ 昭和三〇年代、囃子保存会四代目会長のT氏が壽山の若い衆筆頭るとき、近郊の村落にシャギリを頼みにいった。一升瓶を提げて頼むが受け取らない。二本下げて行くと「いや、なかなか人が集まらない」という。三本目持つて、さらに「お弁当をつけて、お札三万円」というと「そこそ何人かがやるときにくれる。頼んでも、「役者がお弁当を先に食べている」「サービスが悪い」「お酒が来ない」などといって曳山から下りてしまう。早く帰ってしまい戻り山がないこともあった。

中老のシャギリの認識 かつては山組の中老などは「シャギリは、ほつとけ」という理解だった。今もそういう人はいる。

かつての起し太鼓 若い人が遊びにいつているので、置屋のおかあさんがお札にと起し太鼓に三味線で来てくれた。お酒を持つていつて「おばちゃん頼むわ」「わかりました」と、内輪の遊びのようなものだった。昔は、看板を持つていつたり、ガラス戸をばんばんと叩いて「起きよ、起きよ」とうたつたりと賑やかだった。戸を叩かれないように、電気を点けて、戸を開けていたこともあった。

テープでシャギリを流す テープでシャギリを流すが、スピーカーが前の山組のシャギリと重なりうるさかった。電気屋がついて調整するが、なかなかうまくできなかった。

囃子保存会への参加 昭和四六、七年頃壽山もシャギリをしてくれな

いかと頼まれ、宮町会館で練習を始めた。

シャギリの傳承の断絶と再開 壽山ではシャギリの傳承が一度途絶えている。昭和五三年頃教えていた高校生が受験で来られなくなり、しかも習っている子どもも少なく、シャギリが途絶えた。数年後孔雀山のある人が教えていたが、亡くなって、また途絶えた。傳承が途絶えていた間は、シャギリはほかの山組の応援によって演奏されていた。

練習の再開 平成一六、七年は常磐山と一緒に練習をしたが、子どもも増えてきたので最近になって分かれて練習することになった。

【鳳凰山（祝町組・魚屋町組）】

囃子保存会加入以前、鳳凰山は主に長浜市唐国（旧虎姫町）から雇いシャギリをしていた。加入後は、保存会が指導する曲を演奏している。初めて曳山祭でのシャギリに女子の参加を認めた山組である。

雇いシャギリ シャギリは近郊の村落に任せていたので、年齢が上の人はシャギリができない人が多い。曲は村落（長浜市小一条（旧長浜市）、長浜市布勢など）によって少しずつ違っていた。いつも同じ村落に頼むのではなく、気に入らなかったらかえることもあった。各村落に頼みにいき、「山に合う」シャギリを連れて来ていた。その人たちにとっては曳山祭でシャギリをすることがステータスだった。お金はそんなに多くはないが、ごちそうとお酒がもらえる。町の人には、お金を出してよその村落に頼んで「自分の町に合った派手なシャギリ」を選んだらいい、と思っていた。鳳凰山は昭和三〇年前後には唐国から雇いシャギリをしていた。唐国のシャギリは現在の保存会のシャギリと違ってどろくさく、テンポも違う。

昭和五〇年頃のシャギリ 昭和五〇年頃には現在のシャギリの伝承形態になっている。

現在のシャギリ 保存会のS氏が採譜した保存会のシャギリをしている。

起し太鼓の変化 かつては「桜囃子」を吹いていた。ある時期に鳳凰山では「菊囃子」の方が主たる曲であることがわかり、昭和六三年頃から「菊囃子」を吹くようになった。今では、「菊囃子」と「桜囃子」をどちらも演奏する。

かつては、片町から芸者が来て、起し太鼓で三味線をしていた。

女子の参加 鳳凰山が女子を祭りのシャギリに初めて入れた。弁当山（後山）に乗せた。女子の晴れの舞台で、当時の新聞にも載った。女子を載せるのは画期的だった。鳳凰山はオープンな気質である。女子に教えてどうのこうのという人があるが、女子は自分の子どもに教え、それが続くかもしれない。

【翁山（伊部町組）】

囃子保存会加入前、翁山は国友の人にシャギリをしてもらっていた。戦前も同様の状況だった。国友では数人でグループを作り、シャギリをしていた。しかし、昭和四〇年前後から、シャギリの人手不足により、テープにしたりチンドン屋を呼んだりと試行錯誤していた。また保存会が出来る前から自町でシャギリをする気運が高まり、国友からシャギリを教わる人もいた。囃子保存会結成後は保存会が教える曲を、筆頭を中心に伝承している。

国友のシャギリ 昭和三〇年代、シャギリは頼むものだと思っていた。

昔から国友に専属の囃子方がいた。七、八人くらいのグループだった。年配者が多く、なかには腰の曲がった人もいた。

戦前にも翁山の若い衆がシャギリをしているのを見たことがない。

国友にシャギリを依頼するのは筆頭の仕事だった。三月頃、筆頭・副筆頭とで国友に依頼しに行く。丁寧に依頼しないと来てくれない。扇子を持ってお願いにいったら受けてくれる。一三日の晩から後宴狂言、そして山蔵に曳山を入れるときまで来てもらった。毎日自転車で通ってきていた。昔は田植えが六月だったから来やすかったのかもしれない。演奏する場所は亭のなかだったが、外にもよく聞こえた。国友へのお礼は謝礼金と賄いであつた。

起し太鼓 昭和三〇年代、自町の人にも、「起し太鼓」だけは演奏できる人がいたので国友の人と一緒に演奏した。五、六時まで夜通し演奏した。ゴミ箱をよそへ持っていたり、酒を飲んだり、食べたりしながら五回くらいまわる。一回まわって町家に戻って酒を飲んで、またまわる。酒を飲んでるときに色んな話をする。芸者が二人来た。ただ昭和四〇年代、芸者は徐々に来なくなっていた。

昭和四〇年前後から起し太鼓を近郊農村に頼まなくなった。笛を吹く人がいないときは乳母車にテープを載せ、テープの笛に合わせて太鼓を叩いた。昭和五〇年頃、子どもも起し太鼓に参加するようになった。

自町でシャギリをするきっかけ 昭和四〇年頃、国友の囃子方が高齢化などの原因で人手不足になった。三、四人しか来ないこともあった。勤め人が増え、すぐに帰ってしまうこともあった。当時、シャギリは四つの山組で取り合いだった。長浜市大戌亥（旧長浜市）や長浜

市下坂（旧長浜市）からも来ていた。

そこで、北出町にいたチンドン屋さん（一人）にシャギリを頼んだことがあった。また、一度だけ、曳山に拡声器をつけて録音テープを流したことがあった。しかし、テープは終わり方が悪く、不評だった。

シャギリが満足に出来ない状況下で、自町でもやらないといけないという気運が生まれた。市から自分らでシャギリをしたらどうかという話もあった。保存会ができる前から自分らでしなければいけないと思っていた。興味のある人が国友の人からシャギリを教わることもあった。

シャギリの担い手の変化 昭和四六年は近郊からシャギリが来ていた。昭和四九年には、保存会が教えた、主に壽山の子どもが応援に来てくれた。

自町でのシャギリの練習 保存会から声を掛けられて参加した。子どもに教えるのが囃子保存会に入る条件だった。翁山は囃子保存会に加入するのが早い方だった。

昭和四九年の出番山が終わってから練習し始めた。当初保存会が教えたのは若い衆だった。大人だけでは伝承が続かないので、子どもにも教えるようになり、若い衆は世話係になった。翁山は当初、当時の筆頭T氏がシャギリを教わりにいき、その後、徐々に教わりにいく人数が増えていった。大通寺の婦人会館で保存会のS氏に教わった。子どもは覚えが早かったが、大人は指がついていかなかった。

昭和五二年頃町家でT氏らが子どもを集めて毎週土曜日から日曜日にシャギリの練習をした。町家で練習を始めた当初は保存会のS氏

が教えにきてくれた。T氏が教えられるようになってからは、T氏の家で練習をするようになった。

昭和五〇年代前半には、必ずしも若い衆の筆頭がシャギリの指導をするわけではなく、出来る人が指導する状態だったが、昭和五〇年代後半から筆頭がシャギリを教えるようになった。現在でも翁山では筆頭がシャギリを指導している。

初めは男子だけがシャギリをしていた。自町だけでも小学生の男子が一二、三人いた。当時は女子が参加する雰囲気ではなかった。小学生を対象に教え始めたが、その子たちが中学生になってもシャギリを続けた。今では若い衆も中老もシャギリをするようになった。

シャギリを始めた当時は自町に子どもがたくさんいたが、段々と自町の子どもが減ってきて、よその子も入ってきた。また、祭りのときは、自町とよその山組の囃子方を融通し合うようになった。

シャギリの練習場所 翁山は伊部町と三ツ矢町に分かれている。三ツ矢町には昔から会館があったが、伊部町に会館ができたのは平成一三、四年である。かつて翁山を構成している伊部町と三ツ矢町の関係が芳しくない時期があり、シャギリの練習を始めた当初、三ツ矢南会館を練習場に貸してもらったことが頼みにくかったため、大通寺で練習させてもらった。その後大分仲がよくなって三ツ矢南会館で練習させてもらうようになった。

若い衆のシャギリの関与 昭和四〇年代、ほとんどの若い衆は笛を吹かなかった。何人か好きな人は子どもと一緒に吹いた。ただ、シャギリを吹かなくても何の曲かは知っていた。

女子の参加 昭和五八年に筆頭の二人が女子もシャギリに参加でき

るようにした。ちょうど男子が減ってきた頃だった。それに女子が出られないのもかわいそうだった。また、各家から祭典費を徴収しているにもかかわらず、女子が出られないと不公平に感じることも女子を参加させた理由だった。

シャギリヤタイ（囃子屋台） 昭和五〇年代後半に屋台を寄付を募って作った。当時よその山組でも作り始めており、翁山は二番目か三番目だった。シャギリヤタイとよんだ。職人に作ってもらった。もつと大きいのを作ってもらいたかったのだが、当時は町内に会館がなく、置き場がなかったので、小さめにした。

子どもにとっての練習の楽しみ 三ツ矢町と伊部町は子ども会が違うが、シャギリ練習のときは一緒に遊べるので、嬉しそうに来ていた。近郊のシャギリと自町のシャギリ 現在翁山でしているシャギリと近郊の囃子方にももらったものとは曲が違う。

現在の国友との関係 今はない。当時は仲間内でシャギリをしていたため、今では国友でも長浜にシャギリに行ったことを知らない人が多い。

【常磐山（呉服町組）】

昭和五十一年に囃子保存会に加入する前は、大戌亥から雇いシャギリをしていた。しかし昭和四〇年頃に大戌亥からの雇いシャギリができなくなり、そのあとはテープでシャギリをしていた。

昭和五十一年に保存会に加入するも、当初は人数が少なくほかの山組から応援に来てもらっていた。本格的に常磐山でシャギリを始めたのは昭和五五年からである。そのあとも人数が少ない状態は続いたが、

現在は町外の子どもを受け入れるようになり構成員が三〇人弱と、囃子方の人数が多い山組の一つとなった。

雇いシャギリ 大戌亥から雇いシャギリが来ていたが、取りまとめる人が亡くなってから来なくなったという。大体昭和四〇年くらいまで来ていた。

テープでシャギリをおこなった年 昭和四三年は録音テープでシャギリをおこなった。

囃子保存会に加入した年 昭和五十一年に常磐山は保存会に加入した。**保存会加入当時の指導者と子どもの数** 昭和五十一年当時の指導者は当時保存会会長だったS氏と高砂山の人で、教わった子どもは七人である。当時は囃子方の家や負担人の家で練習した。

鳳凰山の応援 昭和五二年の出番では、鳳凰山が応援に来て一緒にシャギリをおこなった。

常磐山だけのシャギリ 昭和五五年から、最初に教わった子どもが中心になって、常磐山のなかだけで出番をこなせるようになった。

囃子の担当 常磐山は昭和四六年から総祭りの形態で祭りをしているが、シャギリは若い衆が受け継いできた。

起し太鼓 昔は起し太鼓の三味線に、芸者さんを呼んだりもした。常磐山は、そうして起し太鼓を絶やしたことはない。

女性参加の変遷 女性はいく山に關することはしてはいけないが、シャギリについては、屋台の周りで演奏し、「切り笛」・「出笛」のような独奏する場面でも女子がおこなうことが増えている。一、三〇年前に既に女子はいたが、出演する際には端っこだった。また自町だけだった。一三年前には既に「切り笛」を女子が吹くこともあった。現在、

自町狂言の「出笛」は通常男子が吹くが、いない場合は一番うまい女子が吹く。

囃子方の規模の変化 二、三〇年くらい前には、子ども五人に指導者三人だったこともあった。一五年前は子どもは一〇人以上に増えた。最近は数だけなら三〇人弱いる。ただし一五年前は子どもはすべて自町だけだったのが、今は自町は少なく外から来た子どもが多い。

シャギリの低年齢化 二〇年以上前は、シャギリの練習に来られなくなるのは中学校くらいからだだったが、今では小学校高学年以上になると習い事や塾などがあるため低学年化している。現在三〇代以上の人が子どもの頃は、先に役者をやって、その後にシャギリ（小三くらいから）をした。そして裸参りをして、若い衆として子どもの世話、やがて中老という順序だったが、今は子どもが借り役者の場合は、シャギリから役者と順番が変化する場合もある。

【孔雀山（神戸町組）】

戦前に孔雀山に芝居のグループがあったため、シャギリを演奏できる人がいたが、出番山のときは狂言執行に人員が割かれるため、近郊農村から雇いシャギリをしていた。昭和三七年から自町で独自にシャギリの練習を始めたが、出番山のときにシャギリができず、近郊農村から雇いシャギリをしていた。その後、練習は途絶え、昭和五二年に囃子保存会に加入後、再び自町で練習を始めた。しかし、指導者不足などの要因で平成初頭に再び伝承は断絶した。平成二三年二月から、若い衆が中心となって自町でシャギリの練習を再開した。

戦前のシャギリ 戦前、孔雀山には大人がする芝居のグループがあ

り、そこでシャギリもしていたため、明治生まれの人でシャギリを吹ける人がいた。その内の一人は古道具屋を営んでおり、そこで笛や太鼓を購入した。諫鼓山の人もそこで笛を購入したことがある。

しかし、祭り当日は町内の人は狂言の執行などに人員を割かれシャギリができなかったため、近郊農村の人にシャギリをしてもらっていた。とくに大戌亥からのシャギリに来る人が多かったと聞いている。大戌亥とは祭り以外でも商売上の交流があった。大戌亥の人は物の取引をしにきたついでに、町へ情報を仕入れにきたりしていた。そういうときにシャギリを請け負っていた。戦後になってからは大戌亥との交流はなくなった。

自町でのシャギリ 戦後孔雀山には、太鼓ができる大正生まれの兄と笛のできる昭和二年生まれの弟のK兄弟がいた。K兄弟はシャギリに熱心で、昭和三七年頃から町内の若い衆にシャギリを教え始めた。

練習場所はK兄弟が営む店舗の地下室か町家で、K兄弟から一対一で習った。練習方法は、指使いはK兄弟が手書きで書いた笛の穴を押さえるところが図示された運指表を用い、旋律は口伝で教わった。「ウーヒョー」などとうたって覚えた。譜面を持ち帰り家に帰って自主練習をした。教わった曲目は「奉演間」・「御遣り」・「起し太鼓」・「神楽」である。笛は各自で用意して吹いた。太鼓はK氏が叩き、すり鉦は交代で叩いた。

しかし、出番山のときは、狂言の執行などで人手が足りず、シャギリをする余裕がなかった。結局、出番山のときに亭に上がってシャギリをするのは近郊農村の人だった。当時は長浜市高月町雨森（旧

高月町)の人が孔雀山に上がっていたことがあった。雨森にも曳山があつて、シャギリのグループがあつたのである。また、暇番山のときも、孔雀山はほかの山組にシャギリの応援に行くことはなかった。

徐々に練習をする人が減り、練習し始めて二、三年目で途絶えた。完全に吹けるようになった「起し太鼓」だけは毎年自町で演奏し続け、それ以外の曲は祭りで誰も演奏しなかったため、忘れられていった。

起し太鼓 起し太鼓は自町の人で演奏していた。起し太鼓で吹く曲は二曲あり、一つは高砂山と同じ曲で、もう一つは「桜囃子(別嬪ともいう)」という曲である。「桜囃子」は芸者さんに三味線をしてもらい、歌もついていた。起し太鼓では「桜囃子」が多く演奏された。

起し太鼓はリアカーに太鼓を載せてまわっていた。

テープでのシャギリ 昭和四六年は、テープでシャギリをしていた。

「戻り山」や「出笛」もテープを流した。

囃子保存会への加入 昭和五三年に囃子保存会に加入した。笛は当初各家にある笛を使っていたが、徐々に保存会をとおして購入するようになった。楽譜は保存会が作成したものを使った。保存会に加入してからは、子どももシャギリをするようになった。しかし、女子が曳山に上がれず、男子は狂言に出るため、出番山のときに自町でなかなかシャギリができなかった。そこで、囃子保存会をとおして、青海山・月宮殿・諫鼓山などからシャギリの手伝いに来てもらった。応援に来た山組によってシャギリの曲が異なった。今でも出番山のときに自町でシャギリができないため、ほかの山組から応援に来てもらっている。

シャギリの断絶 平成の初め頃、指導をしていたS氏が亡くなり、シャギリが途絶えた。それまでの練習は壽山と一緒にしていた。壽山は練習できる場所がなく、一緒に孔雀山の町家で練習をしていた。S氏は米原から引越してきた人で、当時既に大人だった。米原でシャギリを習っていたのか、すぐにシャギリができるようになった。

シャギリの復活 平成二年から二年くらい青海山でシャギリを習っていたこともあるが、途絶えた。再度、平成三年二月一六日から自町でシャギリを再開した。現在は諫鼓山の人が、保存会からの派遣という形で教えにきている。ただ、男子はシャギリを習っても、出番山のときに役者や御幣使になるので、なかなかシャギリが続かない。次回の祭りのときに、自町でシャギリができるかどうか難しいところである。

第三項 独自の曲を伝承する山組

独自の曲を演奏する山組は三つ(月宮殿・猩々丸・萬歳樓)ある。各山組は戦前から自町でシャギリを伝承していた山組である。しかし、萬歳樓は第二次世界大戦中にシャギリの担い手の減少により、伝承が途絶え、戦後に長浜曳山祭が再開した当初は近郊農村から囃子方を雇っていた。また、復活に際しても高砂山とともに四ツ塚などから教わっており、囃子保存会の曲と共通点が多い。月宮殿と猩々丸も戦中に途絶えていたが、戦後、戦前からのシャギリ(ハヤシ)を復活させている。

【月宮殿(田町組)】

囃子保存会設立以前は、若い衆が中心になってハヤシを担っていた。しかし、昭和四〇年代前半頃までは若い衆の人数が少なかったため、長浜市大成亥・長浜市高橋（旧長浜市）から雇いシャギリをしたこともあった。一方で米原や長浜のほかの山組に応援に行っていた。そのときによその外題や振付、役者をスカウトすることもあった。なお、保存会設立以前に既に「ジグルマ」・「シンモン」の伝承は途絶え、「銀のかんざし」・「祇園囃子」を吹ける人はわずかだった。

保存会設立時は月宮殿が中心な山組の一つだった。月宮殿においてハヤシへの子どもの参加は保存会設立より二年ほど早かったが、設立を契機に子どもの数が急増した。

なお、月宮殿では囃子をシャギリとよばずハヤシとよぶ。

戦後ハヤシの再開 昭和二四年に豊国神社の三五〇年祭と市制五周年を記念して曳山狂言が再開したとき、月宮殿では昭和一二年から曳山祭の中断とともに伝承されなくなっていたハヤシを復活した。復活の中心はハヤシを吹いたことの無い二〇歳前後の若い衆たちだった。当時はシャギリができる人の多くが戦死しており、笛を吹ける人がほとんどおらず、まずハヤシの曲を覚えるところから始まった。

昭和二四年の一月からハヤシに精通している下田町のK氏に指導を仰ぎ練習を始めた。K氏は軍隊でラッパの奏者であり音楽的な感性が豊かな人であった。教わった曲は、「獅子」・「ナナシ」・「出笛」・「祇園囃子」、そして起し太鼓で演奏する「桜囃子」などであった。若い衆はK氏の指の動きを見て曲を覚え、その年の春に開催された曳山祭でハヤシを復活させた。

囃子保存会以前の伝承状況 囃子保存会設立以前は若い衆が中心となってハヤシを担っていた。中老は起し太鼓に手伝いがてら参加する程度だった。

若い衆は加入してからハヤシを習い始めた。昭和四〇年代初め頃は年長の若い衆五人くらいが指導に当たり、月宮殿を構成する四町から若い衆を二、三人ずつ合計一〇人くらい集めて教えた。昭和三〇年代後半は囃子方が手薄で、若い衆に加入すると勧誘された人もいた。

練習は月に二回くらいで、今ほど頻繁ではなかった。町内にある寺院・延長坊で練習したり、習っている若い衆の家でした。九時に終わるはずが、終わったら飲み始めるので一、二時くらいになった。

「ジグルマ」・「シンモン」は昭和三、四〇年代には既に知る人がおらず、伝承できていなかった。「銀のかんざし」は知っている人がおり、わずかながら伝承した人がいる。「祇園囃子」は吹ける人は少なかった。ちなみに、「銀のかんざし」は曲調からすると「おちつき（曳山の停止）」に使ったと思われる。「ナナシ」によく似ている短い曲である。

囃子方の立場 囃子方は月宮殿では力を持っていた。祭りにずっと参加している年上の者は皆囃子方にいた。祭りの本番しか来ないような人はハヤシはできない。また、昭和三、四〇年代の筆頭は大体若い衆として囃子方をしていった。筆頭だけでなく当時の若い衆の偉い人はハヤシで曳山に上がっていたため、曳山の下ことはわからなかった。

囃子方の指導者の継承 若い衆で年齢が上がったら、自然に教える

ようになった。囃子方の中で、「次はお前頼むな」というのはあった。とくに筆頭が正式に指名するようなことはなかった。

雇いハヤシ 昭和三〇年代、大戌亥・長浜市高橋（旧長浜市）からハヤシの応援に来てもらっていた。六〇代ぐらいの人が来ていた。狂言を見られるのを楽しみにしていた。

他町への応援 昭和三四年に米原曳山祭に応援に行った。その翌年の出番のときには、米原でしていた外題をした。振付も米原でしていた人で、主役の役者も借り役者だった。昭和四〇年代前半、他町へ応援に行ったことがある。翁山などに応援に行ったが、月宮殿の曲を演奏した。昭和四〇年代前半頃は長浜以外には行かなかった。

子どもの囃子方加入時期 保存会設立と同時に、それより少し前から、月宮殿では子どもを教え始めていた。遅くとも昭和四四年の祭りには小学生が囃子方として参加した。しかし、保存会設立が子どもに教えるようになった契機ではあり、保存会ができてから子どもが急増した。保存会設立当時、既に一五人くらいの子どもがハヤシを習っていた。月宮殿では各若い衆の家で練習するため、子どもは早くからハヤシを聞いていた。したがって、ハヤシに入りやすかった。

囃子保存会設立時の伝承状況 自町で若い衆の家を順番にまわって練習したり、町内の延長坊万年寺で練習した。保存会設立時にすべての山組の子どもが、市民会館で練習したことがあったが、ごく短期間だった。市民会館では月宮殿の曲だけでなく、ほかの山組の曲も吹けるように練習した。ほかの山組の曲も含めて、楽譜は使わずに聴いて覚えた。練習は毎週あった。

囃子保存会への月宮殿の関与 結成当初から参加したほかの山組に

ハヤシをするところが少なかったので月宮殿が中心になったものと思われる。初代会長M氏も月宮殿の人だった。

囃子保存会設立以後のよそへの応援 昭和四〇年代後半（昭和四五年か四八年）に話者の中老が小学五年生くらいで壽山に応援に行き、出笛を吹いた。また、昭和五〇年前後に孔雀山にハヤシの応援に行った。

曳山祭以外での演奏 昭和四〇年代後半に浅井の須賀谷で演奏した。また、長浜総おどりのときに、月宮殿の人のトラックに飾り付けをして、シャギリを披露したことがあった。

起し太鼓 月宮殿には、「にわか（ほかの山組では、桜囃子・別嬪という）」と「起し太鼓」の二曲がある。「にわか」では芸者が三味線を弾いたが「起し太鼓」は旋律が三味線と合わなかった。昭和五〇年頃まで芸者が来ていた。

ハヤシマル（囃子丸）の変遷 昔は竹製の乳母車に太鼓を載せてハヤシをしていた。それがリヤカーになり、さらに台車になった。さらに台車に鉄骨の柱を四本立てて「ハヤシマル（囃子丸）」とよんだ。それがほかの山組で広まった。さらに平成一年に、一〇〇万円くらいかけて現在のハヤシマルを作った。それまでは木で屋根を作る発想はなかった。

現在月宮殿でハヤシができる世代 現在の六〇代後半より上と、五〇代後半より下の世代はハヤシができるが、その間の世代はできる人が少ない。保存会設立以前は、若い衆になってから囃子方に入っていたが、保存会設立以降は子どもがハヤシをするようになり、若い衆に入ってハヤシを習うことがなくなった。昭和三〇年前後に生まれ

た世代は子どもの頃にハヤシをしなかったし、若い衆になってもハヤシを習わなかった。

【猩々丸（船町組）】

戦前戦後をとおして自町でシャギリをする。戦中曳山巡行および曳山狂言の中止や、戦争によりシャギリのできる人が激減したため、戦後伝承が危ぶまれたが、当時の若い衆が数少ないシャギリのできる人に教わり復活させた。囃子保存会加入までは若い衆がシャギリの担い手だったが、加入後は子どもにシャギリをさせるようになった。囃子保存会三代目会長となるN氏が、伝承に携わってきた。

雇いシャギリ 町内で笛を教えるK氏（機織りの店を経営）がいた頃は、戦前もシャギリは雇わずに自分たちで演奏していた。さらに前は、大戌亥からシャギリを演奏する者が来ていたと聞いている。

昭和初期 戦前、若い衆を中心にシャギリは祭りが好きな人が演奏していた。当時シャギリに使う横笛は、竹を伐ってきて乾かし、シャギリの音階がかわらないように、間隔に気をつけながら自分で穴を空けた。シャギリの稽古は口伝によっておこなわれ楽譜などはなかった。上手い人の後ろに座って指使いを見て覚えた。太鼓の叩き方は先生の演奏を見ながら覚えた。

戦争によるシャギリの禁止 日中戦争勃発に伴い、昭和一二年から曳山巡行と曳山狂言が自粛となり、それに伴う曲（「鶴の巣ごもり」・「神楽」・「ゆずりは」・「出笛」）が伝承されにくくなった。一方で、戦争中も起し太鼓はおこない続けた。

シャギリの復活 戦後、祭りの再開のときは、経験もないまま手探

りの状態であり、シャギリもそのときに復活した。四、五人でK氏にシャギリの指導をしてもらっていた。昭和二十四年、豊国神社豊公三五〇年祭で曳山狂言が復活したとき、二つの山組で一緒に一つの曳山を出していた。猩々丸は、月宮殿と一組になって祭りに参加した。月宮殿が祭りに出る際、猩々丸は月宮殿のシャギリの曲を演奏した。猩々丸と月宮殿のシャギリの曲には似ている部分が多く、月宮殿の曲を演奏することができた。

戦後のシャギリ 戦争のため、シャギリを演奏する人が出兵したこともあり、シャギリを伝える人が急激に減った。しかし、戦後も猩々丸や隣接する月宮殿では、独自のシャギリが町内の人々によって伝えられていた。昭和三〇年代には孔雀山などシャギリを伝承していない山組の応援に行くこともあった。

練習日程の変化 昔は祭りの前になると練習をしたが、子どもが参加するようになってからは毎週するようになった。教え方も、昔は一対一で先生の指使いを見て、リズムや音を体で覚えた。

子どもの参加 子どもにシャギリの演奏をさせるようになったのは、町内で合意を得て、保存会が成立してからのことである。昭和五〇～五五年頃は、一二、三歳ぐらいの子どもに教えた。

囃子方 昔は専門の囃子方という役職があったが、今は人が少なくなり、ほかの役職と兼務となっている。昔の囃子方のメンバーは、すり鉦一人・太鼓一人・笛五、六人の計八人ぐらいだった。ちなみに「囃子方」は囃子保存会ができてからのよび方で、それまでは中老がシャギリをおこなっていたので、そうしたよび方はなかったと思われる。
シャギリの練習場所 会所がない頃、シャギリの練習は各自の家でお

こなっていた。

祭り以外の公演 祭り以外でもシャギリがおこなわれた。とくに終戦後は、余興も少なかったため、方々でシャギリを演奏することが多かった。曳山祭が文化財に指定されてからは、東京・大阪・京都などへ公演を頼まれて行くことがあった。本来、曳山祭では、役者もシャギリも男子のみが曳山に上がることになっているが、公演の場合は女子も参加することができた。

栈敷のある家での演奏 子どもの頃、栈敷が設けられた家の前でシャギリを演奏したが、お菓子が出ないときは、シャギリをしなくてもよいなどといわれた。

【萬歳樓（瀬田町組）】

戦前は自町でシャギリをしていたが、戦中、伝承者が激減し、戦後祭りが再開した当時は長浜市本庄（旧長浜市）などから雇いシャギリをしていた。一方で昭和二〇年代から復活させる動きがあり、のちに囃子保存会二代目会長となるS氏ら高砂山の若い衆とともに四ツ塚の人に笛を教わりつつ、昭和三〇年前後に復活させた。萬歳樓も保存会の曲のもととなった四ツ塚から習ったものの、口頭での伝承だったことや、戦前のシャギリを覚えていた人がいたり、四ツ塚以外に長浜市布勢（旧長浜市）からも習ったこともあり、現在は、保存会の曲とは異なるものになっている。また、戦前にあった曲のうち、一、二曲が伝承できていない。昭和四〇年の一時期、ほかの山組や米原に応援に行っていた。

戦前 戦前は自町内でシャギリをしていた。大正生まれの人などは

シャギリができる。

シャギリの復活 戦争でシャギリができた人が亡くなったりして、昭和二〇年代は本庄や布勢・長浜市錦織（旧びわ町）から応援に来てもらった。一方で、昭和二四年の豊公三五〇年祭に祭りが復活したときに、自分たちで練習しようということになった。萬歳樓の曲を知っている自町の人が少ないが、太鼓しか叩けなかったり聞き覚えがある程度で、笛を吹ける人はほとんどいなかった。そこで布勢の人に教えてもらい、町内の人が譜面を書き起した。さらに、太鼓を打つ場所を入れた譜面も作成した。そして、昭和二〇年代後半から三〇年代に自町でシャギリを始めた。

四ツ塚と布勢から習う 昭和三〇年頃、S氏ら高砂山の若い衆と萬歳樓の若い衆は四ツ塚のシャギリのリーダーからシャギリを習った。始めは大勢習いにいったが、最終的に二人だけになった。ほかに布勢からシャギリを習ったとも聞いている。シャギリのヤド（宿）だった家が米屋で、田がある布勢とつながりがあったのではないかとと思われる。

月宮殿のシャギリを学ぶ 萬歳樓では、月宮殿に追いつき追い越せ、という意識がある。シャギリをちゃんと伝承してきたのは月宮殿くらいだと思う。月宮殿のシャギリの組織や、月宮殿の練習の仕方などを教えてもらった。

伝承できなかった曲 戦前に吹いていた曲で一、二曲分らないものがある。戦前に吹いていた「夕華（ユウゲ）」という曲は、今はどこで吹かれたかわからなくなっている。ほかにも神前入りの曲は大正生まれの人は知っていたが、伝承できなかった。

譜面の呼称 かつて譜面のことは「口伝譜」といっていた。現在はフチョウといっている。口でうたうことを現在ではクチョウといっているが、かつてはそういわれなかった。

昭和三、四〇年代のシャギリの担い手 戦前にシャギリを習った世代が中心となってグループを形成しシャギリを演奏していた。線香番は自町で演奏していた。

囃子方の待遇 現在、八、九〇歳くらいの人たちの頃は囃子方の待遇がよかった。小さな子でもシャギリができる子は大事にされたという。

昭和四〇年代他町への応援 昭和四〇年代中頃から後半にかけて、高砂山・狸々丸・諫鼓山・鳳凰山・米原に応援に行った。応援に行くだけで教えることはしなかった。

第四項 長浜曳山祭囃子保存会の曲と独自の曲を伝承する山組

【青海山（北町組）】

昭和三八年までは、唐国や八幡中山から囃子方を雇ってシャギリをしていたが、昭和三〇年代後半頃になると、囃子方へ支払う謝礼や接待費などが金銭的に負担になり、雇いシャギリを止める気運が高まっていた。ちょうどその頃、狸々丸のF氏がシャギリの曲を作曲・楽譜化し、長浜祭囃子保存会を発足させて、各山組に普及し始めていた。青海山はF氏からシャギリを習い、昭和四〇年代初頭から自町でシャギリを伝承するようになる。また、シャギリの伝承をしていなかったほかの山組の応援にも行っていた。当時は農家の兼業化などの要因で

近郊農村から囃子方が集まりにくくなっており、各山組囃子方の確保に苦慮していた時期でもあった。昭和四六年囃子保存会の発足時から加入し、F氏から習った「豊公楽」や「太平楽」のほかに、それまで青海山になかった「戻り山」などを囃子保存会から習った。現在でも青海山はF氏が昭和三七年に発足させた長浜祭囃子保存会の曲（「豊公楽・「太平楽」と、昭和四六年に発足した囃子保存会の曲（「戻り山」・「神楽」・「神楽の出」・「奉演間」・「出笛」を両方とも伝承している。

雇いシャギリ 昭和三八年まで、青海山は自町でシャギリをしていなかった。その年まで近郊農村の唐国・八幡中山から囃子方を雇っていた。ただ当時から起し太鼓だけは自町で「桜囃子」を演奏していた。

しかし、近郊農村の囃子方への飲食代や接待費が、徐々に山組にとって負担に感じられるようになり、雇いシャギリをしないようになっていった。

F氏による長浜祭囃子保存会 昭和三七年、狸々丸の尺八の師範だったF氏が、尺八の楽譜に倣い、0から7まで八音階の数字音符で表現した楽譜を作成した。そして長浜祭囃子保存会を発足させ、長浜八幡宮の参集殿で各山組を対象にシャギリの指導を始めた。そこで青海山の若い衆が四、五人で参加し始めた。

青海山がF氏による長浜祭囃子保存会に参加した当時、シャギリを伝承していない山組のうちの四つから約一〇人が来ていたが、最終的に青海山しか残らなかった。練習は月に一度土曜日から日曜日に一、二時間くらいしていた。最初の二、三年は長浜八幡宮で練習し、その後は青海山の町家で練習した。シャギリを練習し始めてからは、

出番山のときにも、よそから囃子方を応援されることなく、自町でシャギリを演奏していた。

青海山がF氏から習った曲は次の五曲であった。なお、F氏が作成した曲は月宮殿と猩々丸を合わせた新しい曲であった。

「豊公楽」は曳山を曳行するときに演奏する曲である。S氏が四ツ塚をもとに作成した曲には、四月一三日から一五日の曳行時に演奏する「御遣り」と一五日の神輿還御以降に演奏する「戻り山」があるが、F氏が所属する猩々丸で「戻り山」に当たる曲が既に絶えており作譜できなかったため、青海山は戻り山のときにも「豊公楽」を演奏した。曲は月宮殿と猩々丸の曲を合わせたもので、高音を少なくしていることが特徴である。

「太平楽」は猩々丸の「ゆずりは」と月宮殿の「ナナシ」を合わせた曲である。狂言執行前や、曳山が所定の場所に据えつけられたときに演奏する曲である。

「神楽」は神前入りなどで演奏される曲である。猩々丸の「神楽」を使った。

「出笛」は狂言が始まる前に一人で演奏する曲である。楽譜はなく口伝で教わった。

「桜囃子」は起し太鼓のときに演奏する曲である。

このうち、現在「神楽」は伝承されておらず、昭和四六年に発足した囃子保存会が指導している「神楽」を使うようになっていく。

F氏が作成した楽譜は、数字音符のほかに音の長短を表す記号があり、同じ音でもオクターブの違いがわかるように高い方は数字の上に点をつけ、低い方は数字の下に点をつけた。また装飾音はどの

音にどのような装飾音をつけるか一定の法則を作った。このような工夫により、F氏の作成した楽譜を使えば楽譜だけで練習できるようになっており、歌をうたつて旋律を覚える必要がなかった。なお太鼓用の楽譜は作成しなかった。

青海山は戦後シャギリを伝承していなかったほかの山組よりも早く自町でシャギリを演奏するようになったため、ほかの山組にシャギリの応援に行くこともあった。たとえば、昭和四二年に壽山へシャギリの応援に行ったり、昭和四〇年頃に翁山に起し太鼓の応援に行ったりすることがある。F氏による長浜祭囃子保存会は発足後三、四年で解散したが、青海山はその後F氏の作曲した曲を演奏し続けた。

囃子保存会に加入 昭和四六年に囃子保存会（F氏が発足させた長浜囃子保存会とは別組織）の発足当初から囃子保存会に参加した。当初参加していた山組は、当時既に自町で囃子を伝承していた山組が中心で、月宮殿・萬歳樓・高砂山・青海山だった。

囃子保存会に加入後、「豊公楽」と「太平楽」は、二代目会長のS氏がF氏の楽譜をもとに五線譜に作り直したものを使って伝承している。「神楽」はF氏から習ったものは伝承されず、S氏が四ツ塚から習ったものを使っている。さらにそれまでなかった「戻り山」も加入後習い始めた。

昭和五〇年頃から子どももシャギリに参加している。なお、青海山は人数が多いため、囃子保存会加入後も出番山のときに、ほかの山組からシャギリの応援を受けたことはない。

囃子の伝承者	曲目	囃すとき・場所
囃子保存会 (高砂山) (翁山) (春日山) (諫鼓山) (常磐山) (鳳凰山) (壽山) (孔雀山) (青海山) 萬 歳 樓	御遣り	13 日、14 日、15 日に曳山を曳行するときに囃す。ただし、14 日は八幡宮神前（境内入り口）まで、15 日は八幡宮神前を出てから御旅所神前入口までの間で囃す。「ヒヤラ」「のぼり山」「道中」ともいう。
	神楽の出	八幡宮と御旅所の両神前へ入るときや一番山が「翁招き」を受けて囃し、「神楽」へと入る。萬歳樓は神楽の「切り笛」から入る。
	神 楽	八幡宮神前と御旅所神前の曳山着席までの曳山曳行時に囃す。 曳山狂言終了時に「切り笛」の吹き出しから囃す。
	奉演間 (おちつき)	狂言の始まる前に囃す。 曳山が所定の席に据付けが完了したときに囃す。この場合は「おちつき」の囃しという。
	出 笛	曳山狂言開始のとき、一人で吹く。
	戻り山	15 日の夜、神輿還御から囃す。これ以後、「御遣り」に代えて囃す。 萬歳樓は「神楽」から「戻り山」の曲に入る。
月 宮 殿	獅子	曳山の曳行時に囃す。
	(ジグルマ)	曳山の曳行時に囃す。曲名のみ残る。
	祇園囃子	曳山が狂言執行場所に停止したときに囃す。
	銀のかんざし	曳山停止中の曲。
	(シンモン)	曳山停止中の曲、曲名のみ残る。
	ナナシ	曳山停止中の曲、狂言開始前に囃す。「おちつき囃子」ともいう。
	出 笛	曳山狂言開始の笛、一人で吹く。
猩 々 丸	鶴の巣ごもり	13 日、14 日、15 日に曳山を曳行するときに囃す。 ただし、14 日は八幡宮神前（境内）入り口まで、15 日は八幡宮神前を出てから御旅所神前入口までの間で囃す。
	神 楽	八幡宮神前と御旅所神前の曳山着席までの曳山曳行時に囃す。
	ゆずりは	曳山停止時の曲、狂言開始前に囃す。「おちつき囃子」ともいう。
	出 笛	曳山狂言開始のとき、一人で吹く。
青 海 山	豊公楽	13 日、14 日、15 日に曳山を曳行するときに囃す。 ただし、14 日は八幡宮神前（境内入り口）まで、15 日は八幡宮神前を出てから御旅所神前入口までの間で囃す。
	太平楽	狂言開始前と曳山が所定の席に据付けが完了したときに囃す。
各 山 組	起し太鼓	「起し太鼓」「別嬪」「桜囃子」「菊囃子」「オーキョ・オキョ」「ニワカ」などの曲がある。三味線が入ることもある。13 日の御幣迎えや 15 日の朝渡りの前に関係者を起こしてまわる囃子である。

シャギリの種類と囃す場所

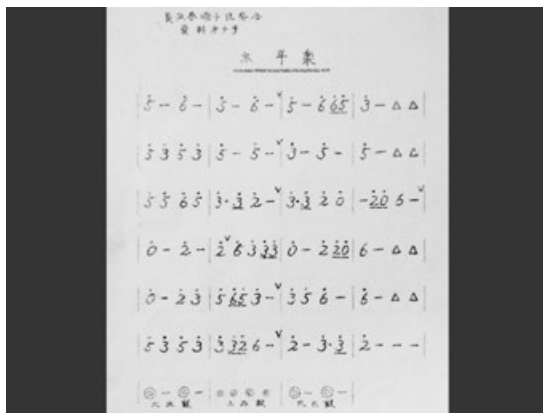
『長浜市史』第 6 巻 祭りと行事 2002 年 P114 抜粋（一部修正・加筆）



保存会が子どもを指導し始めた頃の指導風景（昭和50年頃）



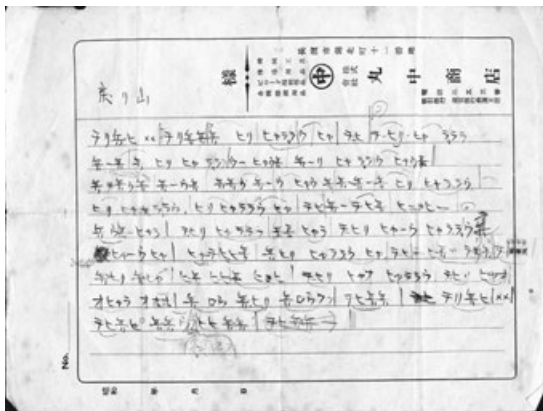
昭和44年のハヤシの練習風景（月宮殿）



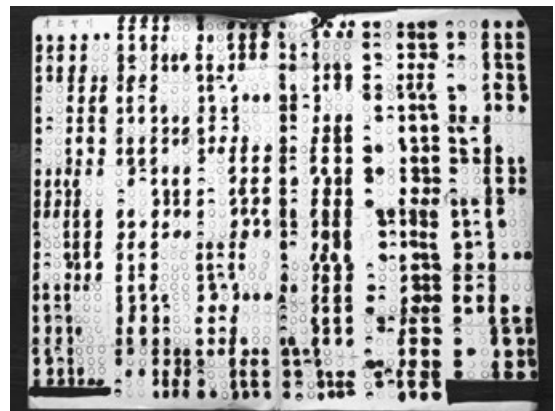
F氏が作成した長浜祭囃子保存会の楽譜



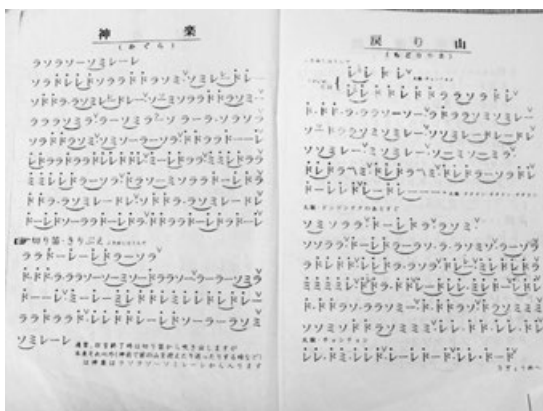
萬歳楼昭和24年のシャギリの楽譜



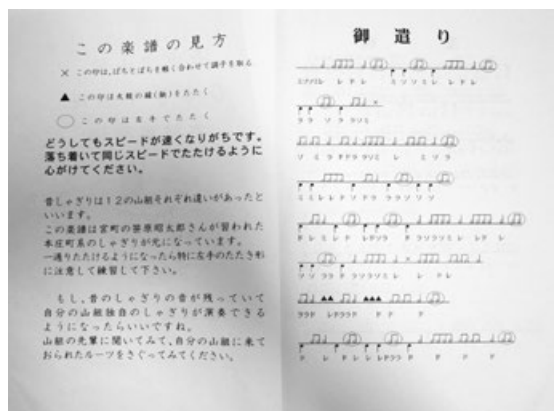
S氏の楽譜覚書



孔雀山昭和38年頃の楽譜



現在の囃子保存会の楽譜（カタカナ版）



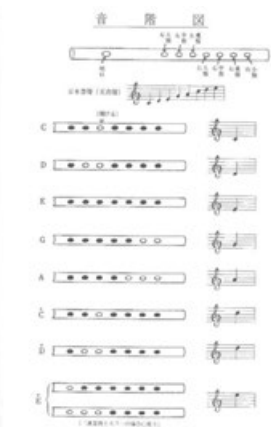
現在の楽譜（太鼓版）



「御遣り（保存会）」（『長浜祭曳山しゃぎり』より）



囃子保存会の曲の説明と音階図（『長浜祭曳山しゃぎり』より）



「戻り山（保存会）」（『長浜祭曳山しゃぎり』より）



「神楽（保存会）」（『長浜祭曳山しゃぎり』より）



「奉演間（保存会）」3・4段（『長浜祭曳山しゃぎり』より）



「奉演間（保存会）」1・2段（『長浜祭曳山しゃぎり』より）



「出笛（保存会）」・「神楽の出（保存会）」・「切り笛（保存会）」・「起し太鼓（高砂山・萬歳樓）」（『長浜祭曳山しゃぎり』より）



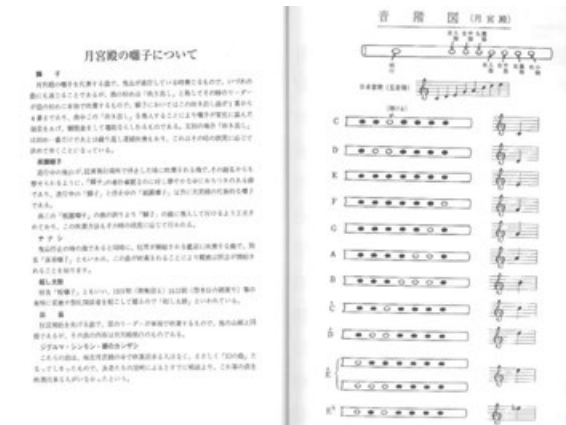
「奉演間（保存会）」5・6段（『長浜祭曳山しゃぎり』より）



「豊公衆 (青海山)」(『長浜祭曳山しゃぎり』より)



「起し太鼓 (きくばやし)」(『長浜祭曳山しゃぎり』より)



月宮殿の曲の説明および音階図 (『長浜祭曳山しゃぎり』より)



「豊公衆 (青海山)」・「太平楽 (青海山)」(『長浜祭曳山しゃぎり』より)



「獅子 (月宮殿)」(2) (『長浜祭曳山しゃぎり』より)



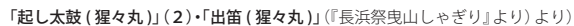
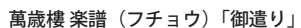
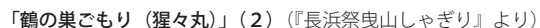
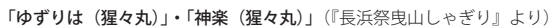
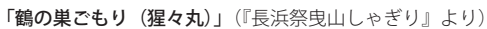
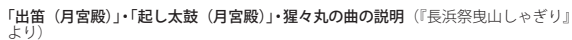
「獅子 (月宮殿)」(『長浜祭曳山しゃぎり』より)

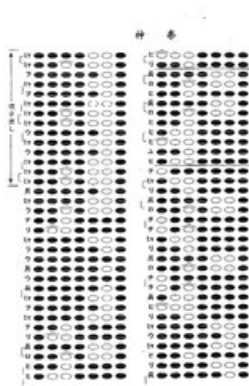


「祇園囃子 (月宮殿)」(2) (『長浜祭曳山しゃぎり』より)

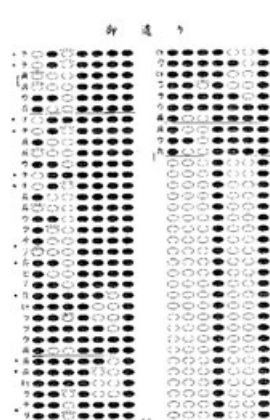
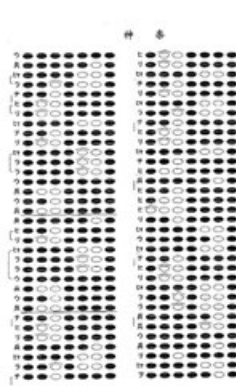


「祇園囃子 (月宮殿)」(『長浜祭曳山しゃぎり』より)

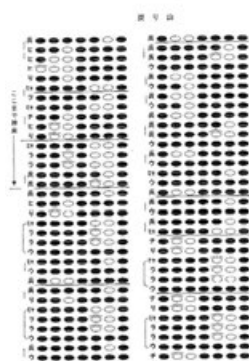
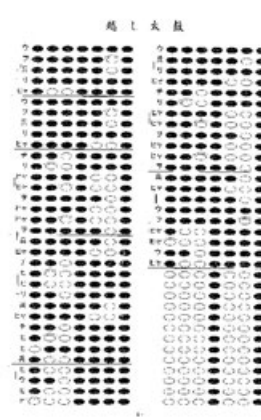




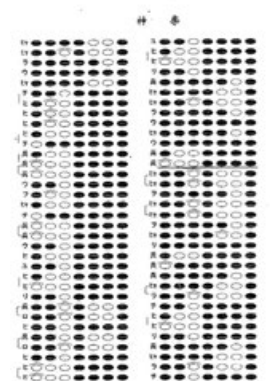
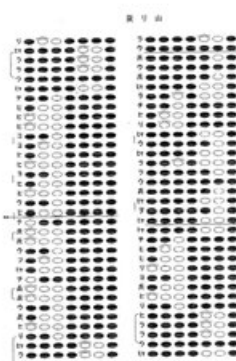
萬歳樓 楽譜 (フチヨウ) 「神楽」



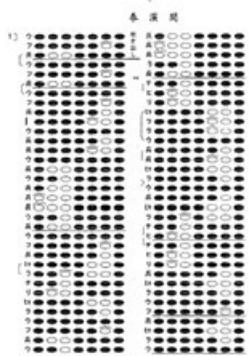
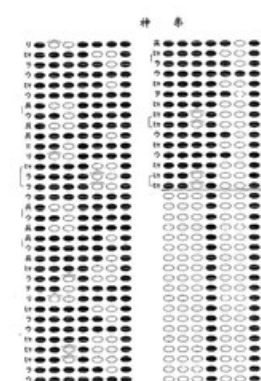
萬歳樓 楽譜 (フチヨウ) 「御遣り」(2)・「起し太鼓」



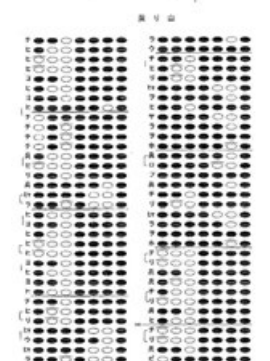
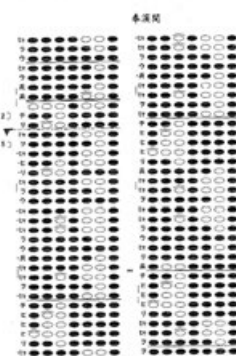
萬歳樓 楽譜 (フチヨウ) 「戻り山」



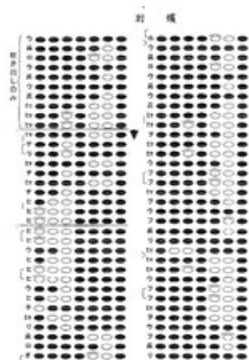
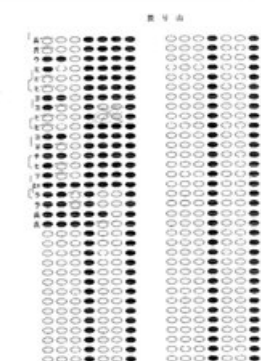
萬歳樓 楽譜 (フチヨウ) 「神楽」(2)



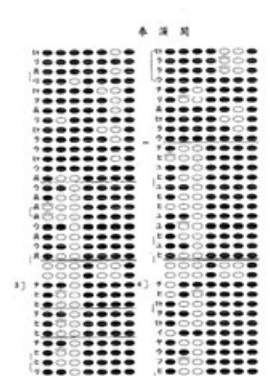
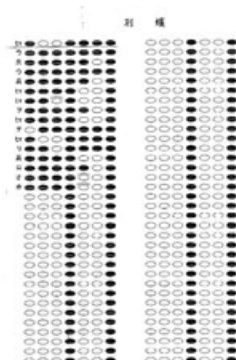
萬歳樓 楽譜 (フチヨウ) 「奉演間」



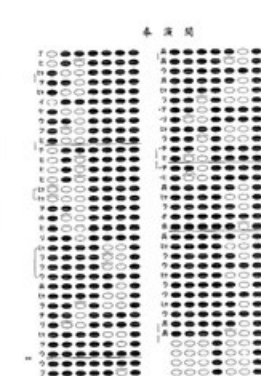
萬歳樓 楽譜 (フチヨウ) 「戻り山」(2)



萬歳樓 楽譜 (フチヨウ) 「別嬪」



萬歳樓 楽譜 (フチヨウ) 「奉演間」(2)



第二節 現状の囃子

第二節では、平成二三年の長浜曳山祭に向けた、シャギリの組織および練習を中心に見ていく。

第一項 組織

囃子組織の多くは山組の若い衆組織に属しているが、萬歳樓（瀬田町組）は若い衆・中老とは別に組織し、独自に規約を作り、会計も別になっている。

メンバーの構成は小学生から高校生が中心で、そこに若い衆が数名指導役などとして加わる。中高生は塾やクラブ活動に時間が割かれるために普段の練習への参加は減少する。人数は孔雀山（神戸町組）の八人から常磐山（呉服町組）の二〇人台後半とばらつきがあるが、多くは二〇人前後である。女性の参加は月宮殿（田町組）と萬歳樓では認められていないため、ほかの山組に加入している子どももいる。

基本的に町内在住の子どもは強制加入ではないが、子どもの数が減少するなか大半が加入している。しかし町内だけでは人数が足らず、すべての山組で外部からの加入を認めており、壽山（大手町組）や常磐山など商店街地域を中心に町外在住者が大半を占める山組もある。戸数の多い月宮殿のように血縁関係を重視する山組もあるが、大半の山組は子どもの友人関係など町組と直接縁のない人の加入も認めている。また、翁山（伊部町組）のように子どもの確保のため加入年齢を引き下げる山組もあり、低年齢化が進んでいる。

出番山的时候は男子が役者となりシャギリをする人数が減ってしま

うため、囃子保存会が調整したり、各山組が独自に調整して、暇番山からシャギリの応援をしてもらう山組が多い。

【長浜曳山祭囃子保存会】

役員 平成二三年の役員は、会長一人・副会長三人・理事一六人（内訳、監査担当・四〇周年担当・総務担当・記録担当・会計および笛担当）・幹事各山組および多びす囃子一人・顧問二人・相談役二人。

囃子保存会の事業 主なものに、①長浜曳山祭でのシャギリの執行、②シャギリの技術向上と後継者育成、③シャギリの発表、④シャギリに関する調査・研究および資料収集、がある。

平成二三年度の主な事業 四月四日曳山博物館の曳山交替式・四月九日一六日長浜曳山祭執行・六日一月長浜市立西中学校の伝統文化講座一五回・七月二四日ずらん通り夜市（常磐山 一七人）・八月一日長濱八幡宮万灯祭（春日山・諫鼓山・月宮殿・青海山 五二人）・九月二三日長浜市立西中学校一年生PTA曳山まちめぐり「起し太鼓」体験（天候不良のため中止）萬歳樓・壽山・鳳凰山・青海山・諫鼓山・常磐山）・一〇月三日豊国神社秋祭り（多びす囃子 一五人）・一〇月一〇日豊公まつり（えびす囃子 一五人）・地芝居サミット交流会（春日山・諫鼓山・青海山 四三人）・一月七日地芝居サミット曳山狂言（孔雀山（月宮殿応援）・翁山 三五人）・一月一日自治労全日本自治体退職者全国大会（春日山・諫鼓山・月宮殿・青海山 五二人）・一月二〇日長浜市立西中学校伝統文化学習発表会にて「御遣り」と「神楽」を演奏（受講生 五九人）・一月二一日NHKふるさと歴史ウォーク「浅井三姉妹ゆかりの地をめぐる」演奏収録（諫

鼓山 一五人)。一月一五、日長浜市曳山博物館特別展「歌舞伎からみたお江の時代」オープニング(壽山 一〇人)。二月五日文化庁・国立文化財機構文化遺産保護国際貢献事業「無形文化遺産保護・パートナーシップ」現地研修にてシャギリの実演および演奏体験(春日山・諫鼓山・青海山 二七人)。なお、演奏を披露する山組は、次年度出番山組を中心におこなう。

【春日山(本町組)】

若い衆のなかで囃子担当を選出し指導に当たっているが、囃子保存会の理事は若い衆の筆頭である。メンバーは小学生を中心に一〇人程度である。町外からの参加および女子の参加も可能である。

囃子担当 シャギリの担当は若い衆のなかで三年ごとにかわる。ただシャギリは若い衆で担当するが組織としては若い衆とは別になっている。

囃子保存会担当 若い衆のなかには囃子担当があるが、現在は筆頭が囃子保存会に出ている。囃子保存会の理事のなかで春日山だけは山組推薦となっている。

練習 練習は毎週土曜日の夜に春日会館でおこなっている。

ほかの山組との協力 ほかの山組との協力は現在ではない。昭和五〇年代には常磐山の人が春日山の亭に上がったことはあるが、途中から手伝いをし合わなくなった。

シャギリのメンバー 町内以外の子どもがたくさんいる。女子のほうが多い。若い衆の友人の子どもや、嫁の関係などで入ってくる。また以前シャギリをしていた父親の子どもが加入することもある。

様々な縁をたどって加入をお願いしている。練習に来るのは小学生が中心だが、祭りの本番には中学生や高校生が来ることが多い。

【月宮殿(田町組)】

若い衆の管轄。若い衆で選出した囃子方(ハヤシカタ)の担当者が指導する。囃子方は男性のみである。小学一年生から加入できる。人数は小学生から高校生を中心に約一五人。月宮殿出身者の血縁や、関係者であれば町外からの参加を認めることにしている。

役員 若い衆囃子方総責(総責任者のこと) ほか若い衆三名で教えていて、太鼓を教えていた高校生や大学生も機会があれば教えにくる。

構成 練習も含めて、メンバーは男子のみ。女子もハヤシをしたいと思っているが、ほかの山組と曲が違うので、活かせる場がない。その理由と伝統との両方の理由があって、女の子は入れていない。練習には小中学生が七、八人くらい参加している。高校生は三、四人で、在席しているが練習にきていない子どもも含めると七人くらいになる。中学生になって部活が始まると来られなくなる。中学生には祭りのときは特別だから普段練習に来られなくても来るようにといっている。

ハヤシを始める年齢 早い子で小学一年生くらいから始める。多くは小学三年生くらいである。

町外からの参加 ハヤシに参加する人が住んでいる地域は、現在では旧長浜市域に広がっていて、消防署や長浜市立南中学校あたり、長浜市立南郷里小学校付近からも来る。五、六年前から長浜市立長浜

小学校の前あたりから来る人もでてきた。どこに住んでいるかは関係がなく、月宮殿出身の人の血縁者が入会する。ほかの山組の子どもが参加することはない。例外があるとすれば女子の場合で、月宮殿のシャギリに参加できないため、ほかの山組に参加することがある。

【青海山（北町組）】

若い衆のなかにシャギリの指導を担当する囃子部（シャギリブ）を結成している。囃子部は五人の若い衆によって組織している。囃子部長は若い衆の副筆頭が務める。シャギリは男女とも参加可能で、小学生を中心に約一〇名である。青海山以外からの参加も認めている。

山組での位置づけ 囃子部は最近できたもので、前回平成二〇年の出番前後に成立した。それ以前は、シャギリを練習する場と、教わる子ども、教える若い衆が当たり前のよう存在していて、とくに指揮する人がいなかった。しかし近年、その曖昧さが問題となり、シャギリを担当するものを「囃子部」として若い衆のなかに位置づけ、部長に副筆頭を据えた。

役員 部長と四人の代表で若い衆のなかに囃子部を形成している。部長は副筆頭が務める。ほかの四人は三年に一回まわってくる出番山に合わせて、囃子部内で四人の代表を決め、出番山の年に合わせて交代している。四人が小学生などにシャギリを教えるという形になっているが、今では高校生なども練習に参加しサポートしてくれるため、代表四人のみで練習を教えるということは毎回の練習のなかでないという。囃子部の子どもたちへは、部長から各種連絡がいく。

その方法は各自宅のポストに連絡用紙を投函しておくというものである。

構成 青海山の若い衆と子どもたちで構成される。部長を副筆頭が務める。祭礼ではシャギリを担当する。メンバーは若い衆が五人（部長・副部長・ほか三人）、子どもたちは山組内の小学生以上の男女一〇人（中学生以上が四名ほど）くらい。自町他町を問わず一年をとおして勧誘している。若い衆は固定ではなく、筆頭の指令によって選任される。シャギリの練習は強制的に町から誘われることはない。練習して祭りに参加したいという意志がある人が参加しているという。

町外からの参加 青海山を構成する郡上町・郡上片原町・中北町・東北町・鍛冶屋町以外の子どもも意欲があれば歓迎して囃子部に入れている。

【諫鼓山（御堂前組）】

若い衆の管轄で、若い衆で囃子方（シャギリカタ）を選出し指導役に当たる。現在の囃子方が若い衆のため、中老が補佐役についている。女性の参加も認めている。町外からの加入は基本的に制限がない。

山組での位置づけ 若い衆の管轄。

役員 若い衆から囃子方を筆頭が三人選んで指導役に当てるが、実際は一人しか来ていない。しかし一人では仕事の都合などで毎週の練習に出るのは難しいうえ、来ている囃子方が二〇代前半と若いため、以前囃子方を務めたことのある中老が、囃子保存会の連絡や保護者との折衝などをして補佐をしている。若い衆囃子方の任期はとくに決まっていないが、現在補佐をしている中老は六年間務めた。

今の囃子方は担当してから三年目である。

構成 現在一七名。女子も参加できる。現在は女子が多いが、例年は半々である。練習には小中学生しか来ないが、祭りのときは高校生や大学生も来る。とくに囃子方の卒業はなく、年齢制限は設けていない。

よそからの参加 基本的に町内の子どもは囃子方に入るが、今年の四月から町内に小学生がいない。現在小中学生のうち諫鼓山の子どもは大体七人で三分の一程度である。ほかはよそから参加している。ほかの山組の子が習いにくることもある。たとえば仲のよい子と一緒に習うためであったり、萬歳樓は囃子方に女子の参加が認められないため、その女子が多く参加したこともあった。また山組でない町からも参加している。駅の西側や長浜市十里（旧長浜市）、長浜市八幡東（旧長浜市）からも来ている。親の送迎のある子もいる。

【高砂山（宮町組）】

構成 調査日（平成二三年三月三日）の練習のメンバー一〇人は、一人を除いて自町の子どもである。自町の子もシャギリ参加は強制していない。「いやいやの子」もいる。

シャギリのできる若い衆 若い衆のなかでシャギリができるのは一〇人位である。山組のなかでシャギリ保存会はない。

他町からのシャギリへの参加 シャギリ練習には、町内でない子どもも多く参加している。町内は子どもが少ない。親が若い衆なので口分田町（旧長浜市）からシャギリの練習に来ている子どももいる。

【壽山（大手町組）】

若い衆に囃子方（シャギリカタ）という役職を設け、指導・事務をおこなう。メンバーは男女問わず、約二〇人で構成される。平成一八年四月まで常磐山と一緒に練習していた。

役員 若い衆の囃子方が指導、事務全般をおこなう。囃子保存会に加入してからも、しばらくシャギリの継承は不安定で、山組のなかでの位置づけも不明確だった。メンバーが増えて軌道に乗り、近年囃子方という役職が若い衆のなかに置かれた。また囃子方以外で笛の吹ける若い衆も指導に当たる。以前常磐山と合同で練習していたため、常磐山の人も指導に来ていた。

構成 壽山では子どものシャギリの担い手は二〇人くらい。しかしながら、受験や部活で忙しい中学生が多く、練習に集まるのは多くて一〇人程度で普段は六、七人くらい。壽山では男子が少なく、女子がかなり多い。練習を始めてもすぐには曳山には上がれない。戦力になるまでに結構な時間を要する。小さい子はいくら練習といっても、やはり遊んでしまう。始めてから、結構な時間は遊んでばかりで練習はできない。小学生低学年が多く、中学生になると受験や部活でなかなか来られない。ただし、中学生は来なくても大体覚えてしまっているの、祭り本番で活躍できる。なお起し太鼓は高校生くらいから担当する。笛を習い始める時期は人によって違う。自由参加のような形で、「友達がやっている」、「興味がある」という理由で始める子どもが多い。

町外からの参加 町内といっても、職住分離で商店街には住んでいないため、車で通ってくる子どもたちもいる。基本的には自分の山組から動かないが、なかにはほかの山組のシャギリにも参加する子

どもがいる。親戚や友達関係を通じて入る場合もある。少子化により、町外からの子どもの参加が増えた。狂言は町内の子ども、借り役者の場合でも町内親戚つながりで参加するくらいで閉鎖的だが、シャギリはオープンである。

祭りの際には男子は役者として人員を割かれてしまい、亭に上がる子どもがいなくなるため、常磐山の囃子方に応援を頼んで、壽山と常磐山の合同でシャギリをしている。また女子は亭には上がれないため、曳山の後ろについてシャギリを囃すことで祭りに参加する。

常磐山との関係 平成一八年四月まで、人数が少なかったときに常磐山と壽山が一緒に練習をしていた。現在は人数が増えたので分かれ、壽山が曳山博物館ワークルームに練習場所をかねて練習している（常磐山は常磐会館）。

出番山のときに若い衆がシャギリの面倒を十分にすることができないため、常磐山から応援に来てもらったり、壽山から常磐山に応援に行ったりして、相互に協力し合っている。

【猩々丸（船町組）】

若い衆の管轄で、若い衆に囃子方役職を設けている。保存会へは中老から役員を出す。メンバーは男女問わず、幼稚園児から加入できる。他町からの参加も認めているが、町外からの参加は一人のみである。

山組での位置づけ 若い衆の管轄である。若い衆に囃子方という役職を設けている。

役員 若い衆に囃子方という役割はあるが、シャギリを演奏できる若い衆たちが、子どもにシャギリを指導する。保存会へは、中老か

ら役員を出す。

構成 子どもは小中学生を中心に一人、男子が四人、女子が七人である。指導者は三人いる。ほとんどは猩々丸の子どもたちである。若い衆が小学校一〜三年の児童を勧誘する。幼稚園児から加入できる。

町外からの参加 現在一人。他町から参加したいという申し出があれば歓迎する。

【鳳凰山（祝町組・魚屋町組）】

メンバーは男女問わず、約一五人で構成されている。町外からの参加者の方が多い。

構成 シャギリは全員で一五人くらい。町の子は全員シャギリに参加する。小学生から中学生が練習に来ており、高校生は練習には来ないが、祭りには参加する。小さい町なので人が足りず、役者をした子どもや友達関係でシャギリの子を「引っ張る」。中老も太鼓を叩きにくる。

町内の子ども 調査時（平成二三年二月十九日）の練習に来ていた一〇人中三人が町内の子どもでほかは町外の子どもである。親などが送ってくれる。町内の子どもが基本だが、町内から出て行った家や関係のある家の子どもなどが参加している。

町外からの参加 「ご縁で」他町から参加している人が多い。町内の人より町外の人の方が多い。

若い衆のシャギリ 若い衆のなかでシャギリをする人もいる。シャギリの必要人数 笛はうまい子であれば四人いればいいので、

太鼓、すり鉦と合わせて最低六人でシャギリはできる。出番なら盛り上げるため、一四、五人から二〇人くらいが準備する。

【翁山（伊部町組）】

若い衆（若い衆組織）の管轄。若い衆筆頭が主に指導する。ほかに若い衆のなかに二人囃子方（シャギリカタ）という役職を設け、囃子保存会との連絡調整をする。メンバーは男女問わず二八人在籍し、実際に来ているのは小中学生を中心に一七人である。町外からの参加も基本的に制限なく認めている。

山組での位置づけ 若い衆の管轄。

役員 若い衆筆頭が主に指導する。ほかに若い衆のなかに囃子方が二人いる。囃子方は囃子保存会との連絡調整をする。しかし翁山は若い衆の人数が少ないので、ほかの役職と兼務している。そのため囃子方という役職自体曖昧なものである。

構成 二八人在籍しているが、そのうち来ているのは一七人である。小中学生が一〇数人。ほかに、高校生や大学生がいる。彼らが来ないと演奏がうまくできない。男女は半々だが男子の方が多い。女子は六、七人在席している。曳山に上るのは男子のみ。女子は下にいる。**町外からの参加** 町内在住の子どもは三人（内、小学生は一人）だけ。残りはよその町の子だが、親が山組出身などで町内に縁がある子や、友達伝いで来る子もいる。

シャギリを始める年齢 以前は三〜四年生から加入できたが、最近はずいぶん少なくなった。一年生から加入できるようにしている。調査時の筆頭は、小さい頃から遊びにきて楽しんでもらえたら大きくなっ

てからまた来てもらえるという。

【常磐山（呉服町組）】

若い衆の副筆頭の一人が囃子方（シャギリカタ）の担当をし、その下に会計が一人いる。メンバーは男女問わず、小学生から高校生までで二〇人前後。町外からの参加も基本的に制限がなく認めている。以前壽山と合同で練習をおこなっていたので、壽山と常磐山との関係が密接である。

役員 筆頭の下に副筆頭とは別に囃子方会長を置き、その下に会計を一人置いている。さらにほかの囃子方として若い衆が三人程度当たるが、必ずしも笛を吹ける人ばかりではない。若い衆とその新しく入った人が囃子方となる。また練習の際には、囃子方以外にも笛が吹ける筆頭、副筆頭、それに町内在住の女性が指導に参加している。**構成** シャギリ保存会のメンバーは中学・高校生も入れると二〇人台後半で、男女は問わない。ただし普段の練習は一〇人以下である。交互に常時六人ぐらいが参加する。最年少は小一で練習への参加は小学生が中心である。小学校高学年以降になると部活などのため、なかなか練習には来なくなる。祭りの当日には既に吹けるようになっている中高生も参加する。

町外からの参加 まったく血縁がなかったり、曳山祭を見て興味を持ち親子でシャギリ練習に参加する人もいる。山組は北国街道沿いのいくつかの町だが、山組を構成する町内に住んでいる子どもは五人以下で、あとは親戚の子どもや友達のとつて来ている町外の子どもたちが多い。米原や彦根から来ている子もいる。たとえば、彦根

から来ている子は、祖父が町内に住んでいる縁で参加している。

壽山との関係 以前まで壽山と合同で練習をおこなっていたので、壽山と常磐山の仲がよく、一方が出番山るとき応援に行くこともある。そのようなわけで「壽山の応援」のために壽山の「起し太鼓」を練習していたが、どこの山がどこを応援するといったことが慣習として決まっているわけではない。

【孔雀山（神戸町組）】

構成 孔雀山の若い衆は現在八人である。その内筆頭を含め三人がシャギリの練習に参加する。子どもの参加者は五人である。その内、一人は他町から参加している。女子も参加している。

【萬歳樓（瀬田町組）】

若い衆と中老とは別に囃子方（シャギリカタ、囃子連中ともいう）を組織する。囃子方独自の規約があり、会計も独自におこなっている。若い衆から囃子会長（兼若い衆副筆頭）一人・副会長二人・会長補佐（顧問）を一人選出し指導に当たっている。メンバーは男性のみで、小学生から高校生までで一五、六人いる。自町他町関係なく募集しているが、大半は血縁関係者である。

山組での位置づけ 若い衆・中老とは別に囃子方がある。囃子方独自の会計で、規約もある。この方法は青海山を真似た。祭りのときには囃子用に宿もある。囃子方には中老も若い衆もいる。

役職 囃子会長一人と副会長二人。現在は副会長が二〇代前半と若いので会長補佐（顧問）を一人置いている。ただし、ほかの若い衆も頻繁に稽古に来る。囃子会長は若い衆の副筆頭も兼ねる。四月の

頭に負担人が酒と扇子をもって囃子方の会長に挨拶に来る。挨拶に来なかったら祭りでシャギリを吹かないということもある。若い衆筆頭も囃子会長には一歩引く。威張らせ優越感に浸らせておくという。囃子方の子が役者をする場合は、まず囃子会長に頼みにいく。

囃子会長をしたら、任期三年間毎週土曜日が拘束される。苦勞しているわけだから祭りのときくらいは偉そうにさせてほしいという。さらに筆頭、副筆頭（囃子会長）はよその子どもに出てもらうために自分の子どもを役者に出さないこともある。すると奥さん連中から「よその子が出ているのにあんたがしつかりせんから、うちの子が出られへんやないの！」と叱られることもあるという。

構成 練習に来るのは主に小学生六、七人である。子どもは自町が多い。中学生になると部活で来られなくなるが、祭りになると来てくれる。中高生を合わせると全員で一五、六人という。だが段々減っている。

女子の参加 現在女子の加入は認めていないが、女子の加入もそろそろ考えないといけないと思っている。女子の方が音がきれいで上達も速い。しかし女子は曳山に上がれない。

昭和五五、五八年には女子も参加していた。当時の囃子会長に娘が三人いて、自分の娘に教えたいから、祭りには参加させないという条件を一筆書いて、女子をシャギリに参加させることになった。しかし、いざお祭りになったら、せっかく練習したしやっぱり出したいなど、女子の親から苦情が出た。それで女子の参加をやめてしまった。

町外からの参加 町内に子どもが少ないのでよそからも来る。親の出

身が萬歳樓など大体親の縁で来ている。子どもは自町他町問わず募集している。昔は敷居が高く誰でも入れるわけではなかった。町内出身でも、親が自町の人間ではないからと遠慮して、話者が子どもの頃(昭和五〇年代)はシャギリに入れなかった。自分の子どもがシャギリを始めてから、同じ趣味がほしくて始めた人もいる。

【ゑびす囃子】

ゑびす囃子は豊国神社内に祀られている恵比須宮の祭礼である十日戎の宝恵駕籠行列に際して演奏される曲で、ゑびす囃子保存会によって演奏されている。ゑびす囃子保存会は囃子保存会の準会員という位置づけであるが、曲目や組織ができた当初から囃子保存会と深くかわりながら発展してきたのでここに掲載することとした。

設立の経緯 昭和六〇年頃、萬歳樓や鳳凰山、十日戎にかかわりの深かったある市会議員が豊国神社宮司と話し合って宝恵駕籠行列を賑やかにするために恵比寿囃子をすることを提案した。宝恵駕籠行列は豊国神社から長濱八幡宮までの行列である。この件が囃子保存会に相談され、当時の会長だったS氏が曲を作った。当時から囃子保存会で指導をしていたM氏がS氏や副会長だったT氏にいわれて昭和六〇年の七月ころから指導を担当して練習を始めた。

設立当初のメンバー 豊国神社の氏子範囲は長浜城外堀より西側、第七連合自治会の範囲でありいわゆる山組ではない。その範囲に住んでいる小学四年生以上の男女に参加を呼びかけたところ約二五人が集まった。会の名前はゑびす囃子保存会であるが、一般的には組織もゑびす囃子と呼んでいる。練習は最初は殿町会館で始めたが、

次の年から豊国神社の参集殿でするようになった。練習を始めたときには既に曲はできていたのでM氏のほか作曲者のS氏も半年くらいは指導に参加していた。やがてM氏が中心になって指導するようになって今日に至っている。M氏の意識は当初より囃子保存会の活動の一つとしてゑびす囃子の指導するというものであった。したがってゑびす囃子保存会のメンバーが曳山祭に参加することも歓迎している。そのこともあって第七連合自治会から常磐山など各山組のシャギリに参加したり、役者になることも多い。

現在の練習 現在でも週に一回水曜日の夜に練習している。メンバーは二人であるが、常に参加しているのは一〇人程度である。

ゑびす囃子 中心の曲はゑびす囃子で、「商売繁盛笹もつて来い」という文句はよその十日戎の曲と同じである。笛・大太鼓・締め太鼓・すり鉦・鉦・樽を使う。鉦は置いて使うが、行列の途中は吊して運ぶ。樽は上を叩く。メンバーが多いときには竹筒を叩くこともあった。ただ行列のときだけの演奏ではもったいないのでゑびす囃子は最初から餅まきの前にも吹いていた。

曳山祭への参加 ゑびす囃子は短い曲なのですぐに行けるようになり、曳山祭のシャギリの曲も練習するようになった。昭和六一年の曳山祭の裸参りの九日と一二日に豊国神社の境内で迎えシャギリをする。また夕渡りのパレードにも参加するようになった。このときには八幡宮で集合して豊国神社まで下ってくる。また神輿の還御にも参加している。そのため「御遣り」・「神楽」・「戻り山」の練習をしている。最初の一、二年は後宴の観劇会にもシャギリとして出たが、四月一六日は学校の登校日にあたることもあるのですぐにや

めになった。その他、囃子保存会から依頼があればイベントなどに
多びす囃子も出演をしている。

秋祭り 豊国神社は一〇月六、七日が秋祭りで子ども神輿が出る（現在
はそれに近い土日になっている）。このときには学校があっても多
びす囃子は早退して参加していた。子ども神輿のコースは長いので
吹き続けるのは疲れる。そこで神輿が休憩するところに先回りをして、
そこでシャギリで迎えて送ることとしている。これは昭和六一
年の秋祭りからしている。休憩箇所は当時は五、六カ所あったが、
現在は二カ所になっている。演奏する曲は「神楽」と「御遣り」で
ある。また平成八年からは豊公まつりが実行委員会形式で始まった。
これは秋祭りの一週間後におこなわれ、鳳輦が広い範囲を練り歩く
祭りであるが、これにも多びす囃子が随行し「御遣り」や「神楽」
などを演奏している。

第二項 練習

大半の山組は週一回各会所で練習するが、月宮殿は若い衆の家、壽
山は曳山博物館で練習する。指導は基本的に若い衆の囃子担当者が担
うが、担当以外の若い衆や町内の女性も指導に関与することがある。
現在の若い衆世代はシャギリのできる人が多く、以前よりも指導者が
豊富なため、習熟度ごとに分けて練習する山組がある。

保存会の曲を使う山組は五線譜の楽譜とCDを用いて曲を覚えるが、
テンポや装飾音などは山組によって違いがある。独自の曲を使う山組
は口伝で曲を覚えるところが多い。

楽器の習得は笛・太鼓・すり鉦の順が多いが、鳳凰山では肺活量の

少ない子どもにすり鉦をさせている。なお、全員が太鼓・すり鉦を習
うわけではない。

以下練習の様子を報告するが、内容はあくまで調査日の状況であ
り、常と同じ内容ではない。

【春日山（本町組）】

囃子保存会の曲を演奏する。練習は「御遣り」・「神楽」・「戻り山」
を全員でドレミの音階でうたい、笛を吹く。休憩後は吹ける子が中心
で「奉演間」・「起し太鼓」を練習する。吹けない子は一緒に音階でうたう。
さらに休憩したのち、「御遣り」・「神楽」・「出笛」の順に練習する。若
い衆副筆頭が指導する。

練習日程 毎週土曜日の一九時～二〇時。

指導者 若い衆副筆頭。練習中、筆頭は脇で腕を組みながら見ている。
指導方法 机の前に正座し、「シャギリ楽譜力タカナ編」「太鼓専用編」
を見ながら練習する。間違うと、「違う」。「最初から」「（そんなんでは）
祭り来んぞ」と注意される。太鼓への指示は、「スピード速い」「
押さえ気味に」「ドン、ドン」「とまるな」と口で指導する。太鼓の
叩けない子どもには「タ、タンタタ、トント・・・」と口で指導する。
多くが譜面を見ながら叩く。

調査日	場所	時間	内容
平成二十三年二月五日	春日会館	19:00	男子四人が前の机、女子三人が後ろの机に座る。指導する副筆頭は子どもの正面に座る。「お願いします」と挨拶する。
19:03	「御遣り」「神楽」練習（歌）		正面に座った男性と、子どもの脇に座っている男性が子どもと一緒に笛を吹かずにドレミの音階をうたう。子どもは机の上に楽譜・笛を置かない。
19:12	「御遣り」「神楽」練習（笛）		楽器を取り出し笛で「御遣り」と「神楽」を吹く。暗譜している子もいる。副筆頭が太太鼓と小太鼓を叩く。
19:20	「戻り山」練習		「戻り山」を音階でうたってから笛で練習する。
19:25	休憩		大人と子どもが一緒に遊ぶ。
19:28	「奉演間」練習		約半分の子どもが「無理！」という。一人ずつ吹く。
19:36	「起し太鼓」練習		「吹ける人、吹いてや」「歌、入る人は（入れて）」といわれ、笛を吹いている子と、口で音をうたっている子とがいる。暗譜している子もいる。
19:40	休憩		足を崩す。
19:42	「御遣り」練習		一人ずつ太鼓・小太鼓をさせ、キリ（切り笛ともいう。曲の最初に小節独奏する部分）を順番にまわす（男子、女子とも）。副筆頭はすり鉦をする。
19:52	「神楽」練習		

囃子練習 参与観察表（春日山）

19:57	「出笛」練習 一人前で前に立って吹く。終わるとみんな拍手。
19:59	練習終了 「今度から、別の若い衆が教える」「返事は？」「いうこと聞かんかったら、祭りもないし、祭りに出さへん」「四月にはちゃんと吹けるように」「わかったか？返事は？」 子どもは「ありがとうございました」と挨拶をし、お菓子を貰い、帰宅する。最終的に男子五人、女子四人である。

【月宮殿（田町組）】

月宮殿独自の曲を練習する。「起し太鼓」・「獅子」・「ナナシ」・休憩を挟み、「獅子」・「祇園囃子」の順に練習する。

練習は主に合奏である。楽譜は用いない。吹けない子は吹ける子の指使いを見ながら習得する。指導は若い衆がおこなう。

練習日程 練習は毎週土曜日、出番の年は四月に入って毎日おこなう。練習予定は例年どおりのスケジュールを三か月くらい前に知らせておく。変更があればその都度伝える。

練習場所 練習場所は家が大きくて、町内在住の若い衆の家一五軒程度で持ちまわりとなっている。練習に使う予定の家が使えなくなったりときや、すべての家をまわりきった場合などには町内にある寺院の延長坊万年寺を使用する。

練習時の演奏者の配置 太鼓に合わせて演奏するために、太鼓を笛が囲むような形で練習する。太鼓の近くに囃子方総責や大学生、吹ける子が座り、その周りに吹けない子が座る。吹けない子は吹ける人の指使いを肩越しに見ながら真似る。

切り笛の指名 太鼓担当の小学生が指名する。

太鼓と笛の関係 太鼓に笛が合わせるが、「獅子」の三番の冒頭だけは太鼓が笛に合わせる。

太鼓の指導法 若い衆の指導役が横で手つきを見せて指導しながら演奏する。

すり鉦の持ち方 月宮殿では五本の指でわしづかみする。

曲の練習頻度 「獅子」を中心に練習する。次いで「ナナシ」を練習することが多い。月宮殿では「獅子」が基本の曲である。「獅子」は年中練習しているため、子どもの習得の度合いが高い。「祇園囃子」は祭りをおして、二回しか吹かないので、普段はあまり練習しない。

曲の難度 子どもたちによると「獅子」の三番の指運びが一番難しいが、四番はリズムを取るのが一番難しいという。しかし、囃子方総責によると、「獅子」よりも「祇園」の方が難しく、「獅子」が吹けるようになってから、「祇園」を吹く。

リコーダーと笛の関係 リコーダーばかり吹いていると笛の腕がにぶる。

出笛の遊びの音 「出笛」の「パラパラパラ」という遊びの音はとくに教えるものではない。人によって癖が出る。わかっていて入れないと、ズレるだけになってしまう。上級者になったらやるもので、どれが正しいというものはない。個人の技量の問題である。昔の人はやってしたが、今はあまりない。

出笛は見せ場 「出笛」は一人でやるものなので、緊張する見せ場である。主に中高生が担当する。それ以下だと最後の音の息が続かないため。

演奏できるまでの期間 子どもによって、演奏できるようになるまでの期間は違う。早ければ一年、遅ければ二、三年かかる。

曲中の掛け声 合間の掛け声は「おりや」「よいな」など三種類ほどあるが、太鼓を打つ人によって違い、明確に決まっているわけではない。耳で聞いたのをいっているのが微妙に異なっている。曲の合間に出てきた「コーノハーデーヨーイヤサーデー」の意味はよく知らない。ほかの山を見ていても、「これは何とっているんだろう」と思うことがある。

昔のハヤシとの違い 以前に比べると、ハヤシのテンポが速くなっている。太鼓の担当が育ちきらないままなので、早く終わらせようとしてしまう。太鼓のペースに笛を合わせるので速くなる。

亭に上げる判断基準 亭の上上がるための基準については明確な決まりはないが、普段の練習である程度音がしっかり鳴っていると判断したら若い衆の判断で上げる。主に上げるのは小学校高学年から中高生である。小学生は小柄なので、スペースに余裕があれば経験を積ませるために乗せる。

神楽と獅子が混同しやすい理由 月宮殿には「ドレミ」がないので、自分のなかにしっかりと曲のメロディが入っていないと、ほかの山組の曲（囃子保存会の曲）につられてしまう。しかも、ほかの山組の曲は学校の授業で習うため、月宮殿の人はどちらの曲も知っている状態で、余計につられやすい。夕渡りは両側で神楽を吹かれるため、とくにつられやすい。近くにいてくれないと聞こえない。

習得する楽器の順序 練習する子どもはまず笛から練習する。笛がダメだから太鼓になるというわけではない。笛が吹ける方が太鼓も

よくわかるため、ある程度笛を吹けるようになってから太鼓をさせる。基本的には笛が上手な子に太鼓をさせることが多いが、なかには笛ができなくても太鼓が上手い子もいる。ただし太鼓の音に笛が合わせるので、笛の方も上手くなってもらわないといけない。

教材 月宮殿では笛も太鼓も楽譜を使わず、見て覚える。わからない場合は手の動きを見て教える。最近では入るときにCDを渡して聞いておいてもらう。楽譜自体はあるが、そのまま演奏しても何かおかしく、同じにならない。昔から聞かされているから、楽譜がなくても演奏できる。月宮殿では、曲の音をドレミファソラシドでは誰もいえない。

笛 以前笛は最初の一本目は保存会から子どもに渡していた。笛は大事に使っていると一生使うことができるが、落したりして割ってしまうこともある。二本目からは自分で買う。笛の穴は七つ。保存会経由で笛を注文する。穴が七つないと出笛が吹けない。笛は直径一・五センチ、長さ三二センチ。

太鼓・すり鉦 楽器は太太鼓一台・締め太鼓一台・すり鉦一つ。古い楽器はとくにない。もう少し小さい太鼓も一つあるが、それが古いものかどうかわからない。締め太鼓、太太鼓、すり鉦は山組で購入している。鉦打ち太鼓の直径三四センチ、長さ四四センチ。すり鉦の直径一〇センチ、厚さ二・五センチ。すり鉦のバチの長さ一〇・六センチ、端（両端）の大きさは一センチ、（中間部の）太さ一・八センチ。

太鼓の修理場所 太太鼓はつい最近張りかえたばかりである。地元で頼むというわけではない。評判を聞いて、金沢の店で張りかえて

もらった。

楽器の保管場所 延長坊万年寺。

調査日	時間	場所	内容
18:55			練習準備 延長坊万年寺から、若い衆の囃子方総責と、学生の男子四人が太鼓とすり鉦を取り出す。若い衆宅へ移動する途中で、反対方向に行こうとしていた二人の若い衆に囃子方総責が声を掛けて合流する。 若い衆のK氏宅へ
19:00			全員、靴を揃えて入室。玄関を入って左手にある和室の居間をとおり、その奥の和室の奥、窓側に太鼓・締め太鼓を置く。部屋の左手奥にはひな祭りのひな壇、左手手前は仏壇、右手奥に箆筒。部屋には絨毯が敷いてあり、その上で練習がおこなわれる。 「起し太鼓」「獅子」練習
19:10			演奏者の配置は、太鼓が中心となり、それを笛が囲むような形。太鼓に合わせて演奏する方が演奏しやすいためである。また、ある程度習得している曲は自由な位置にいても問題ない。 男子の一人が太鼓を担当し、太鼓の方を向いて囃子方総責、続いてほかの男子四人が一列で座り、そして一番後ろに若い衆K氏という順で並んで笛を担当する。 楽器にかかわらず、楽譜は一切使わない。全員が正座。最初に全員で「起し太鼓」を合奏し、その後は「獅子」を合奏する。独奏部分はそれぞれを小学生男子四人、最後に高校三年生（以下高三）の男子の順番で笛を練習。笛が交代する合間に太鼓の子が「オーリヤ」と合の手を入れ、太鼓上部の縁を叩く。 小学生男子二人は笛から息が漏れるような感じで、なかなか音が出ない。 一段落したところで、囃子方総責が小学生たちにアドバイスをする。「間違っても吹いているところは吹ききること」「姿勢を伸ばして、よくすること。そうすると吹くときに音がかわってくるから。」

囃子練習 参与観察表（月宮殿）

19:25	19:22	19:20	19:15
練習再開。「獅子」練習 太鼓担当の小学生が「一番（は誰の担当か）、二番……」と指示を出し、一番から四番の独奏部分を小学生の立候補で決める。囃子方総責は笛の小学生に対して「どこで指を動かし始めるか、やっとかんと」と言葉をかける。 太鼓は、若い衆K氏が横で手つきを見せて指導しながらの演奏。 最初は合奏で始まり、太鼓担当が「オーリヤ」（このときに太鼓の縁を叩く）「ムツ」「ウリナ」という合の手を入れる。途中の笛の独奏は指名された小学生が一人ずつ担当。 これも合奏↓「オーリヤ」↓独奏（一番から四番）↓「ムリナ」↓合奏……という順番。 演奏終了後に、囃子方総責が「三番は難しなるとこやな」「二番はできた」と小学生に声を掛ける。ここで囃子方総責は三役会議のため、一時退出。	ただし小学生たちはそれぞれ笛を吹き、若い衆K氏は一九時二四分頃から太鼓を担当している男子の隣に座って太鼓を指導する。 休憩	若い衆が途中入室 若い衆A氏（おそらく高三の男子と同年代。あとの休憩の時間に、もう一人あとから入ってきた若い衆C氏と親しく、大学受験の話をしていた）が一人、途中から入室して加わる。すり鉦を担当。 小さい子はまだ息が漏れている。囃子方総責からは小学生に対して、「音を出す練習をしてくれや」「少ない息で、息を調整して長く吹けるように」「息継ぎを三回も四回もするのでなく、途中で息継ぎ一回だけで吹けるように」というアドバイス。さらに若い衆B氏が一人、練習に加わった。	「ナナシ」練習 全員による「コーノハーデーヨーイヤサデー」という声で一斉に始める。ひとしきりの合奏のあと、子どもたちが太鼓に合わせて一人ずつ短い独奏、その後続けて合奏、また短い独奏、合奏をくり返す。独奏から合奏にかわるときに、太鼓を叩く男子による「オーリヤ」、また合奏から独奏にかわるときに「コーノハーデーヨーイヤサデー」の合の手が入る。

19:55	19:48	19:42	19:40	19:35
「祇園囃子」練習 「獅子」は終了。若い衆K氏が「祇園囃子は？」と聞くと、太鼓の子が「無理」と答える。「それやったらどうやって八幡さんに入るの」「あと二か月やで」。 若い衆K氏が小学生の後ろから手をとって指導し、曲の三番から手を放して子どもに打たせた。笛も若い衆が前に出て、中央に高三が座わる。小学生は後方に下がり、高三を囲むように整列し直した。笛を演奏するにあたって、上手い人の後ろに移動して見やすくするためである。 見真似で習得することである。	練習再開「獅子」 太鼓の小学生が、また、ほかの子に対して独奏部分を挙手で立候補させ、「オリヤ」という声で演奏再開。楽器の担当や演奏の順序は同じ。若い衆K氏がかわらず太鼓の小学生を指導。三番を担当する小学生が上手く吹けず、中断してやり直し。（この部分は）吹き出しの所だけは太鼓が笛に合わせる」と若い衆K氏が指導（※囃子方総責によれば、これは曲によって違うとのこと）。	太鼓の小学生のみ「獅子」三番の練習 横で若い衆K氏が笛を担当。若い衆K氏が太鼓の小学生に「すり鉦の人に合わせてもらえるように」「どのくらいのペースがいいか、自分のなかでわかってないと。なるべくゆっくりめに。俺も最初はわかんなかった。」とアドバイスをする。ほかは雑談をする。高三、それにA氏とC氏が大学受験についての雑談。若い衆K氏によると「練習に来る」このメンバーはほとんど固定”だという。	若い衆C氏が笛を持って入室 やはりこちらも高三と同年代と考えられる。すり鉦はA氏が担当。	「獅子」練習 今回も一番から四番の独奏部分を小学生の立候補で決める。若い衆K氏はやはり太鼓担当の小学生の横に座り、「ですてでん、よいい」と口に出し、教える。ほかも先ほどと同じ。

20:00	19:59
「祇園囃子」練習継続 若い衆K氏が「太鼓、覚えてないかもしれませんが、頑張ります」と、太鼓を担当。ほかは笛である。これまで太鼓を担当していた子は若い衆K氏の右横に座って手の動きを見ている。太鼓の音が明らかに大きく力強いものにかわる。小学生は「祇園囃子」はわからない」といつていたが、笛を構え、指を動かしていた。音を出していたかは不明。 若い衆K氏「三回くらいせんと戻らん」と反省。囃子方総責「太鼓もおかしかったが、つられて皆もおかしかった」と批評する。 囃子方「来たら「祇園囃子」やったからびっくりしたわ。皆、優等生やな」(それだけ「祇園囃子」は難しいから)。子どもたちに「二か月後には祭りには始まる」三月になったら高校生も来てくれるし、四月に入ったら毎日練習もある。吹けへんかったら山に上げてもらえんから、しっかり練習して。まずは獅子を吹けないと。ただし、この日練習に来ていた小学生のうち二人は役者をする。	囃子方総責再入室 囃子方総責が戻り、すぐに笛として参加する。
20:07	練習終了と雑談 挨拶をして終了。その後、調査者は囃子方総責にインタビュー。ほかの参加者は若い衆K氏の女性が用意したお菓子・ジュースなどを食べ、雑談していた。

【青海山（北町組）】

「御遣り」・「太平楽」・「神楽」・「戻り山」・「豊公楽」・「出笛」の順に練習したあと、調査時は「豊公楽」を重点的に練習した。重点的に練習する曲は毎週異なる。そのあと、休憩を挟み「太平楽」・「豊公楽」を練習する。指導は囃子部の部長と副部長を中心に囃子部以外の若い

衆も関与する。太鼓は中学一年生の男子が担当していた。

練習日程 基本的に毎週日曜日の一九時から二〇時半まで。ただし出番が終わったあとは、大体六月頃から再開される。現在の四〇代が小学生の頃は、シャギリの練習は曳山祭二週間前に集中しておこなっていた。

練習場所 通常練習は相生会議所でおこなうが、出番山の年は、相生会議所が狂言の稽古場になるため、町内の別の場所でおこなう。

指導者 基本的に囃子部の若い衆が直接指導する。囃子部ができるまで（五、六年前）は若い衆に限らず、演奏できる人が教えていた。平成二三年は部長はすり鉦を担当し、あまり練習に口を出さない。補助的に若い衆筆頭が指導をおこなう。練習では副部長が主に指導役である。ただ平成二三年は出番山で副部長が舞台後見の役に当たっていたので、狂言稽古開始後は練習に参加できなかった。

現在のシャギリの指導・伝習 太鼓・笛の譜面を見ながら練習する。ほかにも、音を聞き、指使いを見て覚えることもある。笛の練習では、若い衆が、五線譜の譜面を一つ一つ指で確認したり、笛の指使いを自ら示しながら、メロディーを口伝えで子どもに教える。ある程度吹ける子どもたちが一人ずつ吹く。まだ笛が吹けない子どもはそれを聞く。また、若い衆が、五線譜の音符を一つずつ指で追うのを見ながら、曲を覚えていく。若い衆が子どもたちに、笛の吹き方について指導する。大太鼓・締め太鼓の練習は、太鼓の譜面を見ながら、若い衆が付き添って叩き方を、手と口伝えの両方で教える。

曳山の声がシャギリである。そのため祭り当日は常にシャギリなければならぬ。

かつてのシャギリの指導・伝習 昔は、笛を吹く人がそれぞれ自分でシャギリの音をイメージしながら演奏した。楽譜に頼らずにイメージで吹いた。

習得する楽器の順番 子どもたちは最初に笛を習う。ある程度上達し、なおかつ興味を持つ者が太鼓を習う。今回の祭りでは中学一年生の男子が太鼓を初めて担当する。笛と太鼓がある程度上達したら、すり鉦を担当できる。

笛の音色の変化 笛はあくまで自分が吹く音を尊重するべきだと大人は子どもにアドバイスする。古老によると現在の曳山祭のシャギリは整いすぎて、面白みがなく飽きるといふ。昔は音がバラバラで独自の音があった。しかし怒られることはなかったという。独自流を貫くことが大切であると教育されていた。

太鼓、すり鉦を担当する人 大太鼓、締め太鼓、すり鉦はできる人が臨機応変に対応している。若い衆の中で各楽器の使い方、演奏の仕方を理解している人が二、三人はそれぞれいるという。

個人練習 子どもたちは夏休み頃から笛の練習を始め、各家で宿題という形でシャギリを練習している。

教材 保存会が作成した譜面を使用している。ドレミで表記された楽譜を見て練習し、慣れてくると楽譜を見ずに練習する方法をとる。楽譜表紙には「長浜曳山祭シャギリ楽譜 カタカナ編 保存会・一般用」と書かれている。太鼓・横笛の楽譜がある。CDは使用しない。

太鼓 大太鼓は去年新調したばかりで、今年は新しい太鼓を使っている。そのためなるべく練習で多く叩いておき、祭り当日は新しい音をあまり出したくないという。各山に聞かれると新調したことが

わかり恥ずかしいからである。前に使用していた太鼓は、囃子保存会から紹介され桑名で購入した。今は相生会議所の二階に保管している。締め太鼓の準備では、演奏する子どもが自分で紐を締める。
すり鉦 すり鉦は大太鼓・締め太鼓よりも古いとされ、三〇代後半～四〇代前半の人が子どもの頃にも現在のすり鉦を使っていたという。

調査日	場所	内容	時間
平成二三年二月一三日	相生会議所	相生会議所に若い衆や子どもたちが集合する。若い衆は囃子部の部長・副部長など九人。背中に「青海山」の文字が入った青いパーカーを着ている。子どもは八人。その内笛が五人、太鼓が一人、楽器を演奏しない子が二人。 一〇畳強ほどの一階の部屋で練習する。基本的に上座はなく、部屋を中心に締め太鼓と大太鼓を置き、その周りを囲むように笛が座る。 「御遣り」「太平楽」「神楽」「戻り山」「豊公楽」練習 「御遣り」は囃子部長がすり鉦を担当。副部長が笛を習い始めた子に、直接楽譜を用いて指導。つぎに「太平楽」「神楽」を練習する。若い衆から「締め太鼓が続くと、どうしても速くなる」と注意が入る。さらに「戻り山」「豊公楽」を練習。「豊公楽」のとき、副部長が、太鼓の指導にまわる。太鼓を叩く子の横で、バチを持ちながらタイミングや打ち方を曲中に指導する。 「出笛」 笛だけで練習する。若い衆から「楽譜どおりでもいいし、自分流にアレンジしてもいい」、「曲が途切れるようなミスはいけないけれど、そうでなければミスしてもかまわない」、「最後のミ（音階）がきれいに出来るとかっこいい」と指導する。	19:00 19:15 19:27

囃子練習 参与観察表（青海山）

19:35	20:00	20:19	20:26
「豊公楽」 副部長によると、毎週一曲ずつ練習している。今週は「豊公楽」の週とのこと。副部長の指示で、一人ずつ吹く。 若い衆から「楽譜どおりでなくてもいい」、「昔シャギリをやった人はいわせると、今は曲がきれいすぎて面白くないらしい。曲の流れを全員がイメージして、多少違っても、それぞれの音が合わさったほうが面白い」とアドバイスする。 最後に全員で「豊公楽」を練習する。	休憩	「太平楽」 全体で練習したあと、一人一回ずつ練習する。二人の女子が一人で吹く。	「豊公楽」 全員で吹く前に副部長と若い衆から、子どもたちそれぞれに指示する。「楽譜を見るな」、「太鼓が速くなりすぎないように」、「(女子二人に対して)最後は何も(指導を)しないから」 パンフレット用の集合写真を撮影し、その後解散した。片づけは各自でする。

【諫鼓山（御堂前組）】

囃子保存会の曲を練習する。「御遣り」・「神楽」・「戻り山」・「奉演間」の順に練習し、休憩を挟み、再度「御遣り」・「神楽」・「戻り山」の順に練習する。若い衆囃子方が太鼓を叩きながら、練習の進行と指導をする。初心者へは音の出し方を教えたり、一緒に吹いて指使いを教える。

練習日程 一年中、毎週日曜日一九時半から二〇時半までです。平成二三年の初稽古は一月二三日。

指導者 若い衆囃子方が主に指導する。補佐役の長老はたまに注意をする程度。スケジュールや出欠確認などの事務や、楽器の世話をおこなう。練習に顔を出すほかの若い衆はとくに指導しない。

指導方法 若い衆囃子方が太鼓を担当して練習を進める。ときには笛の吹けない子と一緒に吹いて教える。そのとき太鼓は別の人が叩く。一月二三日は女子中学生が叩いた。山組での練習前に楽譜とテープを渡して曲を覚えてきてもらう。楽譜は五線譜。子どもたちは小さいころからシャギリを聞いているので、楽譜を見ずにすぐに吹けるようになる。ただ、子どもは手が小さいので笛の穴が塞げず、初めは音が出ない。

習得する楽器の順番 普通初めに担当するのは笛。初めから太鼓をする子は稀である。太鼓やすり鉦は中学生以上が多い。曲を知っているので太鼓はとくに教えなくてもすぐにできる。

練習時の楽譜 皆、練習時に五線譜の楽譜を床に広げているが、ほとんど見ずに演奏している。太鼓だけは、前に譜面台が置かれ、楽譜を置いている。

練習時の服装 普段着。

笛 囃子保存会の笛は保存会の助成があって四〇〇〇円くらい。材料費によつて値段が変動する。補佐役の長老がハッピーの色に合わせて笛をカシユウ（合成漆）で赤く塗っている。塗料代は一缶一〇〇〇円。それで七、八本塗れる。自分で籐を何千円か出して釣具屋で巻いてもらう人もいる。もし店で黒塗りにしてもらい籐を巻くなら三〇〇〇〇円かかる。

子どもにシャギリの事を嫌いになつて欲しくない。祭りのときは

一時間吹きっぱなしで大変なので、お遊びみたいなことが必要である。塗って欲しいという子どもの笛に塗っている。

太鼓 音の低い大太鼓と音の高い締め太鼓が二組ある。二組ある山組は珍しい。本番用の大太鼓は古い。本番用の大太鼓と締め太鼓は曳山に載せてもずれないように、太鼓の台に曳山に引つ掛ける止め具がある。少なくとも九年前から革を張りかえていない。新しい大太鼓は一年前に革を張りかえたので音が高い。踏んだり酒をかける音がよくなるといわれるが、実際にはしていない。長浜の太鼓店で革を張りかえている。各山組によって張りかえる店は違う。太鼓店は諫鼓山の中老の紹介である。

調査日	場所	内容	時間
平成三年一月二三日	御堂前町家		
19:15		指導する中老と若い衆囃子方が到着する。	19:15
19:20		子どもたちが到着し始める。小中学生の女子三人、男子一人。部屋の隅に散らばって正座で待機する。	19:20
19:35		練習開始 若い衆囃子方が「始めましょう」というと、小学生の男子が「お願いします」といい、皆で「お願いします」と復唱する。 中老が今後のスケジュールを連絡する。 若い衆囃子方が「人数が少ないけど頑張っていこう」という。	19:35
19:38		「御遣り」練習 一回とおす。進行の若い衆囃子方が切り笛を指名する。子どもたちは保存会が作成した五線譜の楽譜を見ながら吹く。吹けない子は楽譜を見ながら指を動かす。若い衆囃子方が太鼓を、中学生くらいの女子がすり鉦を担当する。ほかの人は笛を吹く。	19:38
19:42		「神楽」練習 一回とおす。若い衆囃子方以外は徐々に足を崩す。途中中学生の女子が到着し、そのまま笛を吹き始める。吹き終わると中老が到着したばかりの女子に楽譜を渡す。	19:42

囃子練習 参与観察表（諫鼓山）

20:30	20:26	20:22	20:20	19:55	19:52	19:48
練習終了 男子が「ありがとうございました」といい、続けて全員で復唱する。	「戻り山」練習 一回とおす。若い衆囃子方が切り笛を若い衆にお願いする。	筆頭が来て練習の様子を見ている。 「神楽」練習 一回とおす。若い衆囃子方が切り笛を副筆頭をお願いする。途中で若い衆の囃子方が来て練習の様子を見ている。	「御遣り」練習 一回とおす。若い衆囃子方が吹けない子に付き添って吹くので、かわりに中学生の女子が太鼓を叩く。しかし自分のテンポが正しいか気になって、若い衆囃子方に確認する。中老がすり鉦を叩く。副筆頭も一緒に笛を吹く。	「休憩」 若い衆囃子方はまだ吹けない子に音の出し方を教える。ほかの子たちは大人と一緒に雑談する。休憩中、若い衆の副筆頭二人が入室する。（囃子の稽古終了後若い衆で会議がある。）	「奉演間」練習 一段、二段をとおす。すり鉦は省略していた。	「戻り山」練習 一回とおす。暗譜している子もいる。

【高砂山（宮町組）】

囃子保存会の曲を練習する。「御遣り」と「神楽」を休憩を挟みつつ繰り返し練習し、最後に「戻り山」と「奉演間」を練習する。練習は初心者と上級者に分かれておこなう。初心者は主な練習はドレミの音階でうたい、上級者は笛を吹く。指導は高砂山の若い衆が主におこなう。

練習日程 基本的には第二、四土曜日に練習する。出番山の年には一月から毎週する。若い衆も練習に出る。

指導者 指導者は自町の者。若い衆が主にしているが、若い衆時に指導していた中老も関与している。

指導方法 初心者とある程度できてくるようになった者とに分けて

指導する。起し太鼓は子どもには教えておらず、若い衆に教えている。

楽譜 囃子保存会の楽譜を使う。

笛 囃子保存会が一本につき三三〇〇円補助し、四〇〇〇円で売っている。種類は、太いものと細いものがある。昔の値段は三〇〇〇円だったが上がってきた。常磐山のM氏が保存会の注文を扱っている。一時は名古屋で頼んだこともあった。

太鼓 太鼓は張りかえて使っている。船町に太鼓屋があった。ほかにも旧長浜市域に太鼓屋があった。張りかえは高いので、今は保存会が修理費の一部を助成している。大太鼓は六年前に張りかえた。高速度路に乗って美川（石川県）まで行った。締め太鼓は新調した。古い方は残っていない。

すり鉦 すり鉦は二組ある。バチはもともとあったと思うが、今は六角ボルトで叩いている。すり鉦は囃子保存会が頼み、月宮殿の鉄工所の人に成分をみて作ってもらった。二〇個程作り、欲しいという山組に分けた。

調査日	場所	時間	内容
平成二三年三月二日	宮町会館一階和室	18:58	男子五人、女子二人。男子の一人が太鼓、ほかは笛。太鼓の正面に向かい合う形で笛の奏者が座る。すり鉦担当の男性は太鼓担当者の左に座る。
		18:59	練習開始。譜面を使用しているが、暗譜している女子は使っていない。
		19:00	「御遣り」練習 全員で吹く。指導者、ドレミの音階で指導。 途中、笛担当の男子、女子が一人ずつ新たに加わる。 「御遣り」の演奏終了後、中老は若い衆の指導役に對し、「太鼓。譜面どおりに吹く。せきこむ感じがなくて。チャカスカ、チャカスカチャン、教えなくてや、」子どもの太鼓担当者に対し「CD聴いてみ」と指導する。

囃子練習 参与観察表（高砂山）

19:31	19:28	19:14	19:10	19:06	19:04
奥の部屋で練習再開	「休憩」 前半練習終了。休憩中は自主練習。 初心者の子どもは休憩中に「しんどい」「あごはずれる」「頭痛い」と訴える。	「御遣り」・「神楽」練習 手前の部屋では「御遣り」と「神楽」を繰り返して練習。途中、笛担当の男子が一人加わる（一六分頃）。奥の部屋では、音階を歌いながら指の形を数小節ずつ、ゆっくり練習。	「神楽」演奏終了。笛のメロディが違っている箇所があるということで、その部分を練習する。	「神楽」の音階を一段ずつ口でうたい、指導者が笛で吹き、みんなで笛を吹く。これを繰り返す。「楽譜見んと、先生の指見て吹けばいいよ。」 「神楽」演奏終了。笛のメロディが違っている箇所があるということで、その部分を練習する。	初心者・上級者を二つに分ける。指導者と笛担当者数名（初心者）は奥の部屋へ移動し、指導者と向かい合う形で笛担当者が座る。 上級者・太鼓（小学生中学年の男子）、笛（小学生高学年男子二人、中学生くらいの子一人） 初心者・女子（小学三年生と小学校低学年）、男子（小学三年生三人）とその父親・母親。今日初めて参加した子どもは、母親と一緒に、笛を出すに聞いている。

20:00	19:53	19:50	19:35
「御遣り」・「神楽」練習 手前の部屋でも練習再開（「御遣り」、「神楽」）。指導者は太鼓担当者に対し、終わりを急がないよう注意。 「戻り山」練習 手前の部屋で戻り山の練習。奥の部屋では、演奏に合わせてドレミでうたう。指導者は、譜面を指してうたっている箇所を示す。 「奉演間」練習 奉演間を練習。まず、一段だけをうたう。太鼓は打たずに打つ恰好だけ。次に、太鼓の演奏をつけてもう一度一段をうたい、二段もうたう。その後、少しゆっくりしたテンポで一段と二段を笛で吹く。 「奉演間」は代々の課題、吹く機会が少なく、なかなかうまく吹けない子どもが多い。」（中老） 練習終了。お辞儀をして挨拶のあと、片づけをする。			

【壽山（大手町組）】

噺子保存会の曲を練習する。「御遣り」・「神楽」・「奉演間」・「戻り山」の順に練習し、休憩を挟み、再度「御遣り」・「神楽」・「戻り山」の順に練習する。最後に「起し太鼓」を五回ほど練習して終わる。若い衆噺子方が、練習の進行と指導をする。平成一八年四月まで常磐山と練習していた関係もあり、常磐山の女性が指導に来ることもあることもあった。

練習日程 毎週日曜の一九時半～二〇時半。以前は隔週だったが強化するために最近は一週一回の頻度で練習している。

指導者 主に壽山若い衆五、六人が指導する。若い衆の噺子方だけで

なく、笛の吹ける若い衆や、常磐山の二〇代の女性、過去に借り役者で壽山に出演したほかの山組の高校生が加わることもある。これは平成一八年まで、常磐山と壽山が一緒に練習をしていたことによる。現在は人数が増えたので分かれて練習している。

笛の指導方法 最初は誰でも笛から練習を始める。笛の音を出すのは難しく、結構時間がかかるので、まず口の形から指導する。入会したばかりの子どもは、ほかの子どもたちが合奏している間、演奏に合わせてカタカナの楽譜に書かれた音を声に出して読み、覚えていく。覚えたら笛を持って吹ける子の指を見て、どこを押さえるのか自分で真似て、指使いを覚えさせる。ただ、小さい子どもは手が小さく、笛の穴を塞げないこともある。

演奏時の姿勢 正座というわけではないが、正座をすると背が伸びて笛が吹きやすい。

高い音の出し方 高い音は強く吹かないと出ない。

笛の湿気と音の関係 唾である程度湿っていないと、笛はよい音が出ない。唾は軽くとる程度でよい。

演奏中の笛の唾の処理 笛は水（唾）が溜まったら、傾けて水分を出す。演奏会などで、唾を出すために笛を大きく振ったりする子もいる。自分の口元と、笛の口が当たる部分だけ拭き取る。

すり鉦の持ち方 すり鉦は小さい子はそのまま持つて鳴らしているようだが、本来は音を響かせないために、中指と薬指を折って残りの指で支えるという決まった持ち方をする。

出演できるまでの期間 一、二年で出演できるようになるが、子どもによって覚える速さはそれぞれである。

シャギリの覚えが早い子のタイプ 女子は楽器の習得が早い。また今の音楽に強い子は楽器の飲み込みが早い。

習得する楽器の順番 最初は誰でも笛から練習を始める。その後個人の能力に応じて、太鼓やすり鉦も練習させてみて、担当を決める。

太鼓と笛の関係 基本は太鼓に笛の音を合わせる。太鼓で先導して、笛は太鼓に合わせてシャギリを囃す。ただし祭りのときは、亭の中にある太鼓の音は笛を吹く子どもに聞こえないので、太鼓が笛に合わせる方法を採用。

シャギリのテンポ 基本的にCDのテンポを参考にして、ゆっくりめで演奏している。速くなりすぎないように注意する。「御遣り」・「神楽」はややゆっくり、「戻り山」は速めのテンポで叩く。シャギリのテンポは太鼓に合わせるものだが、練習では太鼓が結構速めのテンポになりがちである。ゆっくりしたテンポだと息を続けるのが難しく、テンポが速い方が楽という。小さい子は息が続かないので大変である。なお、太鼓のテンポはCDを参考にしてはいるが、叩く人によって差が出てしまう。

笛による音の違い 笛そのものもそれぞれに特徴がある。わずかではあるが、太いもの、穴の大きいものなどがある。大体笛が太い方が吹きやすく、細い方がきれいな音が出る。小さい子は太い方が吹きやすい。笛によって音に差があるため、他人と音を比べて気にしてしまう子どもがいる。

切笛 曲の出だしで一人で二小節くらい吹く。切笛は、音がきちんと出るかを気にして、指名してもなかなか吹き出さない子が多い。

「出笛」の吹き方の違い 狂言上演の前に吹く「出笛」は一人で吹く

もの。それぞれが好きなように吹いてよい。上手い大人のまねをする子もいれば、楽譜どおりに吹く子もいる。「ああ、こういうふう to 吹くのか」と思って聴くものである。

「奉演間」の練習 奉演間は六段までであるが、四段から複雑になり憶えている人が少ないので、テンポをかなり落として、三段くらいまで練習している。練習でも三段までになっている。

楽譜 練習では昭和四〇年代に作られた囃子保存会の楽譜を用いている。楽譜は笛用のもの、それに笛の音程も書かれた太鼓用のものと二種類ある。基本的に子どもたちは笛用の楽譜だけを用いる。太鼓用の楽譜の場合には下向きの音符で笛用の音も書かれている。祭りのとき、どこまでいったかわからなくなったときに、笛の音を聞いて戻ってこられるようにしてある。また楽譜上で、左手で叩くことを表す箇所には○印が入っている。

かつての笛の楽譜は五線譜だったが、現在はカタカナ表記のものをを用いている。

楽器 笛は保存会より各自購入する。大太鼓一台・締め太鼓一台・すり鉦一つ。太鼓は船町の太鼓屋で作られている。

壽山の太鼓の音の特徴 壽山の太鼓は購入してからまだ二、三年目くらいと新しいので、音にまだ重厚さがなく高く聞こえる。太鼓は叩けば叩くほど、時間が経つほどいい音が出る。この音の差は観光客にはわからない。普段から聞いているからこそわかる。

調査日	時間	内容
平成二十三年一月三〇日	19:30	練習準備 若い衆囃子方が曳山博物館ワークルールの鍵を開け、太鼓を出す。また奥の押し入れから座布団を出してきて並べ練習する。 参加者は若い衆囃子方・若い衆筆頭・若い衆二人・常磐山の町内在住の女性・女子A（六年生）・シャギリ開始年齢・四歳・男子A（六歳）・始四歳・女子B（五年生）・始三歳・男子B（三年生）・始一年生・見学に來た幼稚園年中組の子ども一人である。
19:44	19:48	練習開始・「御遣り」練習 「御遣り」を二回とおし練習する。若い衆囃子方が太鼓用の楽譜を見台で見ながら太鼓を担当し、ほかは全員が笛を吹く。大人・子どもの多くは楽譜は用いない。男子Bは楽譜を見ながら演奏。男子Aは、女性に楽譜の該当箇所を指して音階を声に出してもらいながら演奏する。
19:54	20:03	「神楽」練習 「神楽」を二回とおし練習する。この曲からすり鉦が加わる（若い衆が担当）。男子Aの面倒は、途中から女子Aが担当し、女性は笛に加わる。男子Bは楽譜を見ながら演奏するが、笛はほか全員が暗譜している。 「奉演間」練習 「奉演間」の一段・三段を二回とおし練習。一段・二段・三段・三段・一段・二段・三段の順に吹いた。段の間に、「コーリャー！」という掛け声を二回いう。男子Bと入会間もない男性は楽譜を見ながらの演奏。男子Aは女子Aと一緒に譜読みをする。太鼓のリズムでスピードを決めているとのことである。 「戻り山」練習 「戻り山」を二回とおし練習する。女子Bがすり鉦を担当する。男子Aは女子Aと一緒に譜読みをする。

囃子練習 参与観察表（壽山）

【**猩々丸（船町組）**】
 猩々丸独自の曲を練習する。「鶴の巣ごもり」・「神楽」・「ゆずりは」・「出笛」・「鶴の巣ごもり」の順に練習し、休憩を挟み、「神楽」・「ゆずりは」・「鶴の巣ごもり」の順に練習する。若い衆が、太鼓を叩きながら練習の進行と指導をする。「出笛」の練習は一人で吹かせる。
練習日程 暇番山のときは月に一回以上、だいたい第二週目か第三

20:08	20:18	20:22	20:26	20:31	20:33
休憩 休憩中、女子Aは学校で「神楽」を習っているため、若い衆囃子方に太鼓を教わる。女子Bがすり鉦。女性が笛をする。若い衆は男子Aの横について教える。	「御遣り」練習 「御遣り」のおし練習を二回する。若い衆が太鼓を担当する。若い衆囃子方はお菓子を買いに外出する。女子Bがすり鉦を担当する。女子Aは男子Aの譜読みを世話する。	「神楽」練習 「神楽」をとおし練習する。女子Aが太鼓を担当し、女性は男子Aの譜読みの世話をする。	「戻り山」練習 「戻り山」の練習をする。若い衆が太鼓を担当する。女子Bがすり鉦、女子Aは男子Aの譜読みの世話をする。若い衆囃子方が途中で戻り、ほかのメンバーと一緒に笛を吹く。	「起し太鼓」練習 「起し太鼓」を練習する。	練習終了 子どもたちはお菓子を貰い、帰宅する。

週目におこなう。第二、三週の土曜日におこなうというのは、昔から慣例となっている。基本的に、シャギリを演奏できる若い衆に合わせて稽古をおこなう。練習する日が決めてあるわけではなく、曲を忘れないように月一回くらいできることが望ましいと考えている。出番山のときは、祭りが近くなると毎週稽古をする。

指導者 笛の指導は若い衆筆頭と、若い衆のF氏がする。F氏は、筆頭の先輩にあたり、筆頭もF氏からシャギリを教えてもらった。F氏は笛と太鼓の両方が演奏できる。

現在の練習方法 昔からの方法で伝習させている。笛は、指のカタを見ながら音を聞いて覚える。音は出ずとも指のカタから始める。あとは、先に習い始めた子たちが、小さい子に教える。若い衆が小学生一人一人に譜面や音階図を使って指使いを指導する。また若い衆は小学生が吹く笛の音が出ているかなどを、そばで聞いて確認し、持ち方や吹き方、音の出し方を、小学生に細かく指導する。

現在、小学校でもリコーダーでシャギリを習うが、狸丸はほかの山組と曲が違うので、あまり役に立ってはいない。太鼓は、覚えたい子がするが、現在は大人がする。

以前の練習方法 三〇年くらい前は、楽譜を使わず、「音で覚えなさい」といわれた。昔は、シャギリの稽古は厳しかった。笛は音楽が終わるまでは離してはいけないといわれた。

「出笛」の練習 狂言をする前に演奏する「出笛」は、一人で演奏するため、大変緊張する曲目である。年長者は、CDで出笛の音を確認し、指使いも覚えていく。

教材 囃子保存会が作成した譜面とCDを使用する。

笛 囃子保存会が長浜曳山祭の囃子方を対象として限定販売しているものを使っている。

太鼓 大太鼓は一台。革部分の直径三二センチ、胴部分の直径三七センチ、長さ四〇センチ、全高（木製の台に載せた状態）六〇センチ。小太鼓（締め太鼓）は一台。革部分の直径三五センチ、長さ一六センチ。バチは長さ三四センチ。本番用と練習用が二本ずつある。

すり鉦 すり鉦の直径一〇センチ、バチの長さ一六センチ。

調査日	時間	内容	場所
平成二三年三月二日	19:22	練習の準備 若い衆筆頭がCDを用意する。 ほかに若い衆一人、子ども七人が参加している。	船町会館
	19:32	「鶴の巣ごもり」練習 CDに合わせて筆頭と年長の子三人が演奏する。年少の子は聞いて覚える。 この間に、太鼓の担当者の若い衆が締め太鼓を用意する。	
	19:37	「神楽」練習 一回とおしたあと、太鼓方が年長の男子に「神楽、やってみ」といわれ太鼓に合わせて練習する。太鼓は「コーリヤ」と掛け声もやる。	
	19:43	「ゆずりは」練習 二年生の男子に音出しの指南をする。	
	19:50	「出笛」練習 年長の子がCDで音を確認し吹く。 若い衆が年長の男子に「二つの音を長く出してみ」と指摘する。 「出笛」について、若い衆から子どもたちに対して、「出笛は一人でやらないといけないから、ブレスシャアがかかる。みんなでやると、それぞれ（音）の伸ばし方が違うから合わせられない。」 年少の子は、年長の子が演奏するのを聞いて覚える。	

囃子練習 参与観察表（狸丸）

20:30	20:25	20:22	20:20	19:57	19:52
終了	「鶴の巣ごもり」練習 二回とおす。	「ゆずりは」 太鼓を叩く若い衆から、「ビシッ」と決まったら、次で終わるな	「神楽」練習	休憩 子どもたちにお菓子和ジュースが振舞われる。	「鶴の巣ごもり」練習 太鼓を叩く人は「ホイナア、コラシヨ」の掛け声をする。 夕渡りについて、若い衆から子どもたちに対して、「夕渡りの初めから終わりまで、シャギリは横について吹かないといけない。夕渡りを見ながら吹くことになる。」

【鳳凰山（祝町組・魚屋町組）】

囃子保存会の曲を演奏する。練習は休憩を挟みつつ「御遣り」・「神楽」・「戻り山」を二巡する。その後「桜囃子」・「菊囃子」・「奉演間」の順に、主におし練習をする。指導には若い衆のほかに女性も関与する。初心者の子には大人が横について指使いを見せて教える。子どもたちの練習中の座り方は様々である。休憩中は花札や体を動かして遊ぶ。

練習日程 年中、毎週土曜日に練習している。昔は毎週だったが、今は三連休が入ると休みにしている。

指導者 中老の一人が太鼓を叩いている。この人はシャギリについて色々な知識を持っている。その中老は元々町外出身である。

シャギリの指導 譜面で教えているが、譜面だけだと「べたべた」した音になるので、音を聞いて覚えさせる。CDを渡して「聞け」と言う。譜面を渡すが、ある程度覚えると暗譜させる。

女の子は覚えるのが早い。半年で覚えるが、男の子は二年くらいかかる。女の子はまじめだから予習しているが、男の子は遊んでいるからだという。

太鼓、すり鉦の指導方法 太鼓は「琵琶湖の波のように」強弱をつけて、波がよせるように「テンテテ・・」と叩く。強弱がないと、「はやすもの」としての表情がない。太鼓がシャギリをリードする。太鼓を早くするとシャギリも早くなる。太鼓は「スツテンテレスク」と口で教える。

習得する楽器の順番 太鼓は子どもにも教えている。笛が吹ける（メロディーが頭に入る）ようになったら教える。すり鉦は、笛が吹けない子どもに持たせている。子どもは肺活量が小さいので、息が続かず笛はきつい。

楽器の担当 太鼓はシャギリの中心になる人が代々伝えていく。すり鉦は簡単なので、笛が吹けない子どもが担当する。

練習する曲順 シャギリの練習は、本番の順番通りの曲順。「御遣り」・「神楽」・「出笛」・「奉演間（ほえま）」・「神楽」・「御遣り」・「戻り山」。**楽譜** 保存会の楽譜を使う。

笛 笛は個人の持ち物で、最初の一本目は山組が支給する。囃子保存会の笛は、常磐山のM氏が注文を取り扱っている。

太鼓 小太鼓はシメダイコ、大太鼓はタイコという。大太鼓は皮を張りかえて何十年間か使っている。小太鼓は六年位前に張りかえた。**すり鉦** すり鉦はカネという。

調査日	場所	時間
平成二十三年二月一九日	祝町会館	
19:28	内容	会計が会館に来る。
19:29		子どもたちが来る。稽古場に入るのに「こんばんは」という子どももいれば黙って入る子どももいる。中学生？（太鼓担当）が来るのを待っていたよう。太鼓、締太鼓は出入り口から入って正面の壁側に置かれる。会計担当が正座。「はい、今日の稽古始めます」
19:36		すり鉦を小さな男の子二人に渡す。 一人が黙って吹き始め、みんなが続く「御遣り」 （男子七人、女子五人） （二〇歳ぐらいの女性一人、若い衆二人、会計担当も笛を吹く） 譜面を見ている子は二人、あとは暗譜している。 女性が女子の一人について教える。曲を吹きながら指の形を見せる。譜面も広げている。
19:40		稽古中は、正座して笛を吹くが、中には足を立てている子どももいる。大人は正座し、「です、ます」調で説明する。 「神楽」を練習
19:46		「はい、神楽、○○ちゃん」と、指名された子どもが、切笛（曲の冒頭にある独奏部分）を吹く。 「戻り山」を練習
19:50	休憩	若い衆が一人来る。子どもは休憩時間は花札をしたり、暴れたりしている。
20:10	「御遣り」を練習 二回目、「御遣り」、○○ちゃん、アップダウンつけて」と指示が入る。 「神楽」を練習	
20:11	「神楽、○○ちゃん。」練習中、筆頭が来る。	

囃子練習 参与観察表（鳳凰山）

20:16	「戻り山」を練習 太鼓が始め、皆が続く。
20:19	「桜囃子」を練習
20:20	「桜囃子」を練習
20:24	「○○○○○ばやし（聞き取れず）」「奉演間」を練習。
20:28	終了 「お疲れ様です、お祭りまであと二か月、最後に入ってます。」と締め言葉があり、終了する。

【翁山（伊部町組）】

囃子保存会の曲を練習する。「御遣り」・「神楽」・「戻り山」・「奉演間」・「起し太鼓」の順に練習し、休憩を挟み、再度「御遣り」・「神楽」・「戻り山」・「起し太鼓」の順に練習する。若い衆筆頭が、練習の進行と指導をする。保存会の楽譜を用いて練習する。

練習日程 基本は、毎週土曜日午後七時半から練習する。出番の年は五月、六月は休みにして、六月末〜七月頭から再開する。毎年夏休み、運動会などの学校行事のときは休みである。年末年始も休みにするが、平成二十三年は雪が降ったので一二月から休みにし、二月五日が最初の練習だった。通常は一月二〇日くらいから再開する。現筆頭が子どもの頃も稽古は週一回の頻度であった。

指導者 若い衆筆頭が指導する。囃子方の二人は出欠確認などの事務をしたり、一緒に笛を吹くこともあるが、とくに指導はしない。

指導方法 まず音の鳴らし方、息の入れ方を教え、そして音階を教える。最初はできなくてもいいので指を覚えさせる。教えられる人間が少ないため一人でも練習する。兄弟がいるなら兄に教わりながら練習する。小学校高学年くらいになると大分吹けるようになる。

「奉演間」の練習 三段までは練習していた。四段はわからない。

「起し太鼓」の太鼓 「起し太鼓」は太鼓が主役である。元氣いっぱい太鼓を叩かないと起きられない。眠り太鼓になってしまおうという。

装飾音 中学生が「御遣り」に「レ」の修飾音を入れたいと筆頭に伺うと、筆頭は翁山だけで吹くときは入れてもいいと指示する。

練習の雰囲気 以前は三、四年生から加入したが、最近は子どもが少ないため、一年生から加入できるようにしている。小さい頃から遊びに来てもらって楽しい雰囲気味わってもらいたい。そうしたら大きくなってからまた来てもらえる。

休憩 現在はトランプをしているが、筆頭の子どもの頃はピンボールを持ってきて笛で打っていた。休憩が楽しい。

楽譜 昭和五、六〇年代から笛、太鼓が併記された五線譜の楽譜があった。カタカナでは覚えなかった。今はカタカナ表記の楽譜も使っている。

笛 笛は若い衆で買って無料で配布する。

太鼓 山組所有。大太鼓一台、革部分の直径四五センチ、長さ四四センチ。締め太鼓（小太鼓とよんでいる）一台、革部分の直径三五センチ、長さ一六センチ。太鼓のバチの長さ三二・三センチ、直径（太さ）一・八センチ。

太鼓の置き方 練習のときに畳が傷つかないように大太鼓の下に段

ボールを敷く。

太鼓の張りかえ 前々回の出番のときに新しい革に張りかえた。桑名の太鼓屋に張りかえてもらった。修理代の半分は保存会に出してもらった。

すり鉦 山組所有。二組（実際使うのは一組）直径一二・六センチ、堀り込んでいる部分の直径八・七センチ、厚さ二・八センチ。すり鉦のバチの長さ一三センチ、直径七ミリ。両端が太くなっている。太い部分の直径は一・七センチ。

調査日	時間		内容
	19:45	19:47	
平成二三年二月二日	若い衆筆頭が挨拶をして稽古を始める。	「御遣り」練習 「御遣り」を三回連続でおす。 吹いているときの座り方は自由である。 大きい子（中学生くらい）は暗譜しているが、そのほかの子は五線譜の楽譜を見ている。カタカナ版の楽譜を見ている小さい子もいる。 中学生くらいの子が太鼓、それ以外の子どもは笛。筆頭は笛を吹きつつときどきすり鉦を叩く。	子どもたちは囃子保存会の作成した五線譜の楽譜を見ながら吹く。 小学校低学年であまり音が出ていない子もいる。 時折筆頭がテンポや、吹き方を注意する。また、間違いはかまわないと励ますこともある（練習をとおして注意が入る）。
19:52		「神楽」練習 「神楽」を三回連続でおす。	

囃子練習 参与観察表（翁山）

20:37	20:19	20:11	20:08	20:05	19:57
練習終了 例年年末に配っている図書カードを若い衆の囃子方が子どもたちに渡す。	各曲をとおり練習 とおす前に筆頭が「一曲集中」という。 「御遣り」・「神楽」、しかし切り笛があまりよくなくて筆頭は苦笑い。 「戻り山」一回とおすも、太鼓が間違えたのもう一回とおす。「奉演間」の一段を一回とおし練習する。「起し太鼓」を三回とおし練習する。「起し太鼓」が終わったあと、太鼓担当の子が筆頭に「わからん」というと、「今のはよかった」と答える。	休憩 男の子たちはトランプで遊ぶ。	「桜囃子」練習 五回連続でおす。とおす前に「あまり速くならないでね。(筆頭)」とおしたあと、筆頭は大鼓を叩く子に「大分オリジナルだな。大鼓鼓多くないか?」、「もと(の曲)がわからんもん(太鼓担当の子ども)。」	「奉演間」練習 「奉演間」一・二段を一回とおす。「二段がわからない人は聞いて覚える。(筆頭)」大きい子以外、二段を吹けない子が多い。 実際二段目を本番で吹くことはない。	「戻り山」練習 三回連続でおす。筆頭が指名した子が切笛を嫌がり、ほかの子がすることに。 吹き終わったあと、皆、笛の唾を落とすためにしきりに笛を振る。 笛は白木で、塗装や装飾はない。

【常磐山（呉服町組）】

囃子保存会の曲を練習する。「御遣り」・「神楽」・「戻り山」の順に二回繰り返し練習し、休憩を挟み、再度「御遣り」・「神楽」・「戻り山」の順に練習する。最後に常磐山と壽山の「起し太鼓」を練習する。若い衆副筆頭以外に町内に住む女性が指導する。また、壽山とシャギリの応援を合っているので壽山の「起し太鼓」を練習する。人数が多いので、年長の子どもに指導にさせ、分かれて練習することがある。

練習日程 練習は週一回で土曜の夜七時～八時半。休みの場合は前の週に伝える。

指導者 主な指導は若い衆囃子方がおこなう。ほかにも町内在住の女性やほかの若い衆も来て指導をしたり、子どもたちを注意したり、一緒に笛を吹いたりする。常磐会館は若い衆の溜まり場である。

囃子方の相談相手 わからないことは年配の人に聞くという。

囃子方の低年齢化 二〇年以上前は、シャギリの練習に来られなくなるのは中学生くらいからだだったが、今では小学校高学年以上になると習い事や塾などがあるため練習に来られず、練習に来る子どもが低学年化している。

楽譜 音階をカタカナで書いた囃子保存会の楽譜を使う。十数年前には楽譜に息継ぎする場所が記入されていなかった。

笛の指導法 最初は口の形から指導する。曲は声に出して歌ったり、指使いを見せたりすることで覚えさせる。シャギリは、できない人はできる人の右側に座って、見て覚える。

唇を穴に近づけるととき、唇を穴に覆いかぶせすぎると空気が逆に

跳ね返って唇に当たり、空気で唇が震えてしまう。練習して口の角度を覚えたり少量の息で笛を吹けるようになると、唇の震えは改善される。なるべく長く息を続けて吹けるようにする。あまり息継ぎをすると、音が途切れて格好悪くなる。楽譜にはブレスが表記してあるが、それまでにブレスが入る子も多い。

笛はまず音を出すのが難しい。また高い音域から低い音域に移るところの指使いが難しい。穴は指の腹で押さえる。指先で押さえると指をバタバタさせなければならず、円滑に演奏できない。手首に余計な力を入れない。

以前の指導方法 三〇年前には個人指導もよくあった。当時は皆、上手な人ばかりで、スパルタ教育だった。一升瓶を吹いて練習をする。と音が出るようになる。大人は教えながらお酒を飲んだ。

「出笛」がシャギリ習得の指標 「出笛」が吹けたら一人前。

「出笛」の吹き方の違い 「出笛」の吹き方は自由、楽譜のとおり吹いたり、スピードを極端にかえたり、アレンジしたりと個人に任せられる。時間が迫しているときは「巻きで」という注文がきたりもする。

太鼓の奏者 小四から上の男子にさせる。子どもが練習に来ないときは大人がする。

「奉演間」 「奉演間」は、一〜三段は皆吹くことができるが、四〜六段は音がややこしい。これらの段が吹けないために、皆一〜三段をあえてゆつくり吹き、一〜三段で吹き終わるようにしている。

曲によるテンポの違い 「戻り山」は曳山が御旅所から山蔵に戻るときは演奏なのでスピードが早くても構わないが、「御遣り」などは山

のお披露目や時間の調整に使うのでゆつくり吹く。

囃子のテンポの山組による違いとその要因 以前、常磐山と合同で練習していたときは壽山と常磐山ではテンポは一緒くらいだったが、その後常磐山が速くなった。太鼓を担当する人によって、早さが変わった。

笛の購入と手入れ 笛は囃子保存会を通じて各自で購入する。一本四〇〇〇円。笛は太い方が、音が出やすい。また小さい子には穴が小さい子ども用を渡すことが多くなっている。最近の笛は穴の丸いものが多い。

かつては新品の笛を酒で湿らせて音をよくするということがおこなわれた。

太鼓 大太鼓・締め太鼓はかなり前からのもので、十数年前からかわっておらず、張りかえもしていない。使い込んでよい音が出るので当分張りかえる予定はない。締め太鼓は新しいものもあり、一期は大鼓を二つ出して使っていたこともあったが、今まではほとんど使っていない。壊れたら囃子保存会から修理費の一部に助成が出る。

大太鼓の叩く面の直径三五・六センチ、逆側の直径三五・五センチ、幅三五センチ。締め太鼓（近年購入し、ほとんど使っていないもの）の直径三五センチ、幅一四・五センチ。現在使っているもの直径三四・四センチ、幅一五・三センチ。太鼓の撥は長さ三二センチ。

すり鉦 二つあり、普段使用しているものは、直径一二・一センチ。普段使用していないものは直径一二・二センチ。すり鉦のバチはボルトを利用し、長さ一三センチ。

調査日	場所	時間	内容
平成二三年二月一九日	常磐会館	19:00	準備 既に若い衆副筆頭が太鼓の準備を始めていた。
19:10			「御遣り」練習 練習開始。太鼓は副筆頭が担当。女子六人・男子三人。「御遣り」を二回練習する。途中で町内在住の女性が来る。去年の二月くらいに入った子どもも多く、満足に音を出せる子が少ない。女性が中央の子ども三人に対して、音を声に出して読みながら指導。その後、右側の男子に対して指使いを見せて指導する。楽譜が足りず、二、三人で一つの楽譜を共有している。
19:15			「神楽」練習 若い衆が一人入室し、笛を出して練習に加わった。女性が太鼓を打ち、副筆頭は中央の子どもたちに指使いを教える。 「神楽」を二回練習する。副筆頭・女性が音階を声に出して読み、副筆頭は笛を手にとって指使いを教える。
19:22			「戻り山」練習 戻り山二回練習する。切り笛をする小学生を副筆頭が指名した。
19:27			「御遣り」・「神楽」・「戻り山」練習 太鼓を担当する男子が来て、女性は子どもたちの中央へ。「御遣り」を一回練習する。その後、「神楽」と「戻り山」を一回ずつ練習する。暗譜で演奏する子もいる。 子どもたちに対して副筆頭は「自分のペースでゆっくりでもいいから吹いてみて」という。
19:36			休憩 調査者は簡単なインタビューを副筆頭・女性・若い衆に対しておこなう。

囃子練習 参与観察表（常磐山）

20:31	20:23	20:15	20:03
練習終了	「出笛」 男子の一人が「出笛」を吹くと、副筆頭が「ちゃんと吹けてたやん」と褒める。その後、女子の一人が「出笛」を吹く。最後に女性が「最終的にみんな「出笛」を一人で吹けるようになってもらいます」という。	「起し太鼓」練習 常磐山の起し太鼓を五回練習する。太鼓を叩く子に「ゆっくり」と女性が指示する。女性は「常磐山の起し太鼓が一番簡単」という。その後、壽山の「起し太鼓」については、「さっきより早くしてもいいから」と指示する。「壽山の「起し太鼓」はすこし速め、常磐はゆっくりでいい」とのこと。 壽山の「起し太鼓」がわからない子は、一回目は聞いて、二回目から入る。 その後、もう一回演奏。「来年の壽山の応援のときに吹く」という。ただし、「起し太鼓」は大人に演奏してもらわないと無理なので、実際に子どもたちが演奏することはないとのこと。	「御遣り」・「神楽」・「戻り山」練習 「御遣り」・「神楽」・「戻り山」の順に練習する。 年長の女子の一人が「先生に昇格やな」と副筆頭に言われ、半分を教えることに。副筆頭がもう半分の子に指使いを見せながら指導。女性は左端の子を指導。副筆頭が「集中しているとだんだん指がずれてくるので、しっかりと押さえて」という。

【孔雀山（神戸町組）】

囃子保存会の曲を練習する。「御遣り」・「戻り山」を休憩を挟みながら、数回ずつ練習する。孔雀山は平成二三年二月に約三〇年ぶりに山組での練習を再開した。練習はほかの山組と異なり、①個人練習に時間を割く、②練習の指導は囃子保存会とおして諫鼓山の中老と若い衆がおこなう、③若い衆も一緒に指導を受ける、などの特徴が挙げられる。

練習日程 平成二三年二月一六日から始まる。場所は神戸町会館。

週一回おこなう。

指導者 保存会から派遣されている。平成二十三年三月九日は諫鼓山から四名が指導役として来た。

練習方法 口伝、主に指の確認でシャガリを覚えていくようであるが、ドレミの音階、音符表も使用している。これは太鼓も同じである。囃子保存会の出しているCDを使って音の確認をする人もいる。

習得する曲の順序 基本としている曲である「御遣り」を練習し、できる人は「神楽」や「起し太鼓」・「戻り山」などを練習する。

長浜市立長浜小学校の小学生は、リコーダーで「神楽」を習っているため、覚えるのが早い。

習得する楽器の順序 練習はまず笛から始まる。その後太鼓・すり鉦の順に練習する。

シャガリの復活 約二〇年ぶりに山組でのシャガリが復活した。次の出番には間に合わないので、ゆっくり練習する。町内にもう少し子どもがいるので誘うとのことである。祭りは継承していかなければならないが実際のところ難しい。

笛 囃子保存会が仕入れている篠笛を使っている。

太鼓 大太鼓の革部分の直径三六センチ、長さ四五センチ。締め太鼓は二台あり、現在使用中のものは直径三四センチ長さ二五センチ、現在は使用していない、古いものは直径三四センチ長さ一四センチ。太鼓は船町の太鼓屋に修理を頼んだことがある。

すり鉦 三つあるがすべて直径一三センチ。割れているものが一つある。バチは一八センチの金属棒と一一センチのボルトの二種類がある。

調査日		時間		内容	
平成二三年三月九日				場所	
神戸町会館					
19:33		諫鼓山中老が中心で締め太鼓を準備 会館の二階は一〇畳ほどの部屋と五畳ほどの部屋に分かれており、一〇畳ほどの部屋で練習がおこなわれた。中央に机が揃い、机を囲み皆が向い合せになるように練習をおこなう。東方向を上座として太鼓を置いている。			
19:39		子ども三人（男子二人・女子一人）・大人男性三人（孔雀山若い衆）が練習する。 囃子保存会から派遣された諫鼓山中老の二人と、中老の息子が二人（内一人は諫鼓山若い衆）が指導する。 すり鉦は諫鼓山中老、太鼓は中老の息子が担当する。			
		「御遣り」練習 最初に「御遣り」を全員とおして練習した後、皆で合わせるという形にはせず、各自で指の確認や、音の確認といった自主練習の時間に入る。			
20:00		「戻り山」練習			
20:10		「戻り山」練習（速い調子） 諫鼓山中老は「正規の調子ではない。（曳）山が早く帰るように、せかす感じで吹いている」という。			
20:14		太鼓の練習 子ども二人が太鼓を習い始める。（遊ぶような雰囲気です）			
20:19		個人練習 若い衆の一人が、楽譜を見つつドレミ音階を聞きながら練習。			
20:25		「戻り山」（太鼓と吹ける人で）			

囃子練習 参与観察表（孔雀山）

20:40	20:27
終了 全員、練習を止めて正座をして終わりの挨拶をする。	「御遣り」練習 諫鼓山中老が「御遣り」を二回やります」と指示する。「御遣り」を二回連続で練習する。

【萬歳樓（瀬田町組）】

萬歳樓独自の曲を練習する。「起し太鼓」・「御遣り」・「神楽」を休憩を挟みつつ練習する。二度目の休憩後一人ずつ進度に合わせたテストをする。合格者は若い衆やほかの子と「おちつき（奉演間）」を合奏し、不合格者は若い衆と一対一で課題の曲を練習する。その後再度テストをする。休憩中に「別嬪（桜囃子）」を遊びながら演奏する。

練習は、まず歌をうたい、それから笛を吹く。歌をうたうことをクチョウとよぶ。クチョウの音階は「チー・リー・オー・ウー・ヒャー」などで表される。楽譜はフチョウとよばれ、笛の穴を塞ぐ位置を表し、横に音階がカタカナで書かれたものを使っている。太鼓の指導は二組太鼓を並べ、若い衆と子どもが一緒に叩いておこなう。

指導は主にシャギリの役に就いた若い衆がおこなうが、役職以外の人も多く指導に携わる。

練習日程 一年中。毎週土曜日一九時から二〇時半まで。盆と正月は休み。

練習場所 八幡町会館。

指導者 囃子会長・補佐（顧問）・副会長が主に指導する。とくに副会長の二人が指導の中心となる。役員以外の若い衆や高校生も指導に関与する。また、高校生や若手の若い衆に子どもを一対一で教え

させる。教えることで自分自身も覚えるし、若い衆で指導者の立場になったときに経験が生かされる。

現在の練習方法 三〇年前には既に現在の練習方法でおこなっていた。しかし、指導する大人が二人くらいしかいなかった。今は大人が多いので、子どもの進度に合わせて別々に練習ができる。

練習方法の変化 練習は昔の方がメリハリがあった。泣きながら吹いた。何も教えてくれなかったのにいつの間にか吹けるようになる。吹ける子は座布団、吹けない子は板間に座らせたりした。そうして奮起させられたり、優越感に浸らせられたりした。三〇年前からテストをしたり、子どもの進度に合わせて分かれて練習していた。ただ会長によつて練習方法はかえることもある。

昔は若い衆が茶碗を叩いて「この音を出せ！」といわれたりした。三〇年前は酒やタバコをやりながら指導していた。子どもの送り迎えもなかった。今は酒とタバコを禁止しているし、以前より丁寧に教えている。

昭和三〇年代の指導方法 笛の練習のために一升瓶を吹くようにいわれた。大人たちは練習中に酒を飲んでた。笛が乾いたといつて笛に酒を入れて飲むこともあった。当時から試験形式で吹かされた。

笛の指導方法 小学校一年生から始める。まずは笛を持たさず、クチョウといつて歌をうたうように譜面（フチョウ）を読むことから始める。それから笛を持たして指使いだけ練習させる。それが出来てから笛を吹かせる。

笛の指の押さえ方 右手の人差指と小指は塞いだままにする。

自主練習 子どもは笛が持たたいから、家に帰って必死で覚えた。親

は家では教えなかった。

クチョウ 吹けるようになった子でもまたクチョウをする。クチョウは語呂合わせのように覚える。大体指は決まっているが、チーとヒヤーは上と下（オクターブ）で指使いが異なる。猩々丸に応援に行つたとき、ドレミの音階ではわかりにくいので、萬歳樓の音階（チー・リー・オー・ウー・ヒヤーなど）に直したことがある。応援に行つた萬歳樓の者はみんな共通のチー・ウーになった。笛の音を聞いたら自然とチー・ウーに聞こえる。

ドレミの音階になると、どの音がドでどの音がレかわからない。

運指の図をつけたフチョウ 昭和五八年頃一人覚えの悪い子がいた。彼のために、フチョウに笛の穴を押さえる図をつけた。その後、作つたフチョウが便利なのでほかの子どもたちも使つて練習するようになった。しかし、その図に頼るせいで譜面を読み切れない子が出てきた。だから五、六年生に小さい子を教えさせるようにした。昭和四〇年代は吹ける人の前で指を見ながら覚えた。運指の図以外にも「ハバラス」を表す記号も作つた。ハバラスとは指を一瞬押さえてヒヤラヒヤラと音を鳴らすことである。

シャギリができて一人前 萬歳樓では、シャギリができて一人前とされた。役者に出したかったらまずシャギリをやらせるといった。

太鼓の系統 教えてくれた人の系統によつてマンソウ一派、ヨシノヤ一派などとよばれ、叩き方が違う。太鼓の名手だった人がいてこの系統はその人の屋号にちなんでヨシノヤ一派とよばれる。

すり鉦の叩き方 手のひらと指でしっかり握つて音を響かせないようにする。凹んでいる部分の側面を叩く。

すり鉦と太鼓と笛の関係 すり鉦に合わせて太鼓を叩く。すり鉦が主導権を握る。そして太鼓に合わせて笛を吹く。

現在の習得する曲の順番 まず「起し太鼓」を確実に吹けるまで練習させる。そのあと「御遣り」・「神楽」・「戻り山」・「おちつき（奉演間）」「別嬪（桜囃子）」の順に覚える。奉演間は長いうえに、伸ばしたり、切つたり、音を上げたりと感覚をつかむのが難しい。

以前の習得する曲の順番 昭和五〇年代後半〜平成五年頃は、まず起し太鼓を覚えた。起し太鼓は全部の音階がある。そのあとは好きな曲から練習する。そのかわり、起し太鼓のクチョウを完璧にするまで絶対笛をさせない。このやり方は当時の囃子会長が決めた。昭和三〇年代は、まず起し太鼓を練習して、そのあと大人の指示にしたがつて一曲ごと覚えていった。吹けるようになるまで次の曲をさせてもらえなかった。

現在の習得する楽器の順番 初めは皆笛をする。そのなかでリズム感のよい子に、高学年になると太鼓をさせる。大人になってから太鼓を始める人も多い。子どもの練習後に若い衆が太鼓の練習をする。**以前の習得する楽器の順番** 笛、太鼓、すり鉦の順に練習する。笛ができないと太鼓は叩けない。太鼓をしながらクチョウもする。太鼓を叩けないとすり鉦を叩けない。

太鼓の譜面はない。聞いて覚える。横に並んでカラバチで練習させた。太鼓は花形というイメージを植えた。太鼓はよく怒られる。バチで叩かれた。太鼓はよく注意され練習したがらなかった。今、五〇歳代は太鼓を叩けない人が多い。

笛 子どもは大概保存会の篠笛を使う。大人になると各自で装飾つ

きの笛を購入する。笛を入れる袋つきで三〇〇〇円くらいである。装飾付きの笛の方が上手そうにみえる。現筆頭が蒔絵師で、漆を塗ってもらったり、螺鈿で萬歳樓の紋や名前を入れてもらったりする。

太鼓 大太鼓は二台ある。新しい方の太鼓の胴は江戸時代のもので、二〇年以上前に革を張りかえたが、まだ音が高く未完成である。張りかえたときに清めだといって革に酒をかけたらしい。練習で主に使う。祭り本日には亭に載せる。祭りのときはみんな飲んでいていちいち曳山に載せるのが面倒なためずっと亭に上げっぱなしにしている。革部分直径三四・五センチ、長さ四三センチ、高さ（台を含め）六七センチ。

古い方の太鼓の年代は分らない。革の張りかえもいつおこなったかわからない。三〇代の若い衆が子どものころには既に今と同じくらい革が茶色く変色していたので、張りかえたのは五〇年以上前くらいだろう。革がよく伸びているから音が響く。祭りのときはシャギリヤタイに載せる。年配の方は古い太鼓を使いたがる。革部分の直径四三センチ、胴部分の直径約四五センチ。長さ四三センチ。胴部分の膨らみが新しい方に比べ小さい。大太鼓は叩く面を少し下に傾けて使う。

小太鼓（締め太鼓）も二台ある。古い方は保存会ができたとき（昭和四六年）に作り、張りかえはしていない。胴の蒔絵は現筆頭の祖父が制作した。新しい方は一昨年桑名で作った。まだ音が「カンカン」と固い。練習で主に使っている。新しい締め太鼓の直径三五センチ、長さ一五センチ。最近使わないときに紐を緩めなくていいことを知った。バチ長さ三二センチ、直径二二センチ。

すり鉦 以前は沢山あったが今は二つ。直径一二センチ、凹んでいる部分の直径八・五センチ、高さ二センチ。バチは二種類ある。一つは真直ぐで、長さ一六・五センチ、もう一つは太さが均一でなく、長さは一二・五センチ。

しつけ 子どもをよく見ている。大人が子どもの名前を知っている。挨拶もさせる。靴も揃えさせる。できるまで何回も注意する。泣かすこともある。正座もずっとさせる。

子どもの成長 成長を見られることが嬉しい。子どもが来なくなるととても寂しくなる。祭りのときに子どもは急に吹けるようになる。

亭に上る意味 昔は子どもの数が多くて亭に全員が上がれなかった。その分上がれることはステータスだった。萬歳樓は町が大きい。しかも昭和五〇年代、平成五年頃は子どもが多かった。亭に上がない子が出るので、交代で上がらせた。亭に上げるのは上手い下手ではないと思う。毎週一生懸命練習に来る姿勢を買って、亭に上げる。**休憩の過ごし方** 後掲の参与観察表のように個人練習したり自然発生的に「別嬪（桜囃子）」を吹いたりすることもある。子どもが大人にじやれついて遊ぶこともある。

調査日	場所	時間	内容
平成三年三月五日	八幡町会館	18:50	小学生男子二人、若い衆四人（囃子副会長二人と顧問一人、若い衆一人。囃子会長は仕事のため休み）既に到着して、太鼓の設置をしている。
18:55			小学生男子四人到着。到着すると手洗いうがいして、若い衆たちと話している。
19:00			挨拶
19:03			稽古開始。一番大きい子が「これからシャギリの練習を始めます」というと、子ども全員で「お願いします」とあとに続く。若い衆が「声が小さい！」「二基で一番元気なのは萬歳樓だろ」といい、もう一度挨拶をさせる。子どもは六人で、全員男子である。
19:07			「起し太鼓」練習 子どもの一人「ウーヒョーリヒャー」と出笛部分をうたうと、ほかの子が続いてうたう。若い衆は太鼓やすり鉦をしながら「ソーリヤ」と合の手を入れる。クチョウには音程がついている。「起し太鼓」を一同おりクチョウすると、笛で吹く。吹く前に若い衆たちが「ウーの音は出るか」と尋ねると、子どもたちは「ウー」の音を出し始める。それから「起し太鼓」を笛で一回吹く。練習中、子どもは正座をし続ける。楽譜も見ない。
19:08			二〇代くらいの若い衆が到着。笛はきんちゃく袋に入れて首から背中に挿している。
			「御遣り」練習 「御遣り」。囃子副会長が「口から。大きな声でやで」というと子どもは元気よく「ウーヒョー」とうたう。若い衆は微笑みながら子どもがうたうのを見ている。クチョウが終わると、囃子顧問が「今、息継ぎをちゃんと意識できてたか。要らんとこで息継ぎしていたぞ」と指摘する。顧問があとから来た若い衆とすり鉦を交代し、笛を一緒に吹く。

囃子練習 参与観察表（萬歳樓）

19:14	さらに三〇代くらいの若い衆が来る。すり鉦をする若い衆の横に座り、「元気がないなあ」と言う。それから、若い衆にすり鉦の叩き方を教える。
19:17	休憩 休憩中一番大きな子が「別嬪（桜囃子）」を吹き始めると、ほかの人がそれに加わる。段々テンポが速くなる。吹き終わると、若い衆が「テンポが」早いわ」といって、一同笑う。 若い衆が一番大きい子に太鼓を教えるため、古い大太鼓と締め太鼓を押し入れから出す。 その後雑談をする。子どもが若い衆に「〇〇（飲食店の店名）で飲んでたやろ」若い衆は「なんでも知ってるなあ」と笑う。
19:26	「御遣り」練習 「御遣り」を笛で練習する。副会長「集中して真剣にいこう。」一番大きい子が副会長の横に置かれた太鼓と一緒に太鼓を叩く。
19:33	「神楽」練習 「神楽」をクチョウで練習する。副会長が切笛を吹く子を指名する。その後、「神楽」を笛で一回とおす。
19:45	休憩 休憩中も子どもたちそれぞれ練習している。太鼓を若い衆が交代交代で練習している。 若い衆曰く「クチョウで発する「チー」や「ヒャー」について」僕らには（笛の音が）「チー」「ヒャー」に聞こえるんです。」 さらに若い衆が二人来る。 休憩中も部屋の隅では低学年の子ども二人を若い衆一人が付きっきりで教えている。

20:34	20:26	20:10	20:05
整列する。若い衆から「三月に入りました。祭りまで一カ月ちょっとです。締めていきましょう」と締め言葉がある。子どもが「これでシャギリの練習を終わります」と挨拶する。その後、若い衆がテストで合格した子どもに籤引きをさせてスーパールを渡す。 挨拶	一同集合し、再度テストをする。別で練習していた子どものうち一人は「神楽」の笛が不合格だった。もう一人は「神楽」のクチョウを合格する。 テスト	合格した子と若い衆で「おちつき（ほかの山組では「奉演間」とよばれる）」を笛で吹く。四段まで吹く。その後四段までクチョウをする。楽譜に間違いがあることが分かる。 「おちつき」練習	子どもが一人ずつそれぞれの進度によって「神楽」や「戻り山」をテストする。ある子は笛で、ある子はクチョウで。若い衆や大きい子が脇に座り合の手を入れたり、「自信持ってやれ」「いいぞ」など励ます。審査は太鼓を叩く副会長。順番を待つ子は部屋の間で若い衆に教えてもらっている。うまくいけば「いい音やった、いいんちゃう？」などと褒める。不合格の場合、テストのあと、若手の若い衆が一対一で子どもに指導する。クチョウをしながら指だけを習う。笛は吹かない。 テスト・個人指導



稽古（春日山）「奉演間（ほえま）」を一人ずつ吹く（平成23年2月5日19:29撮影）



稽古（春日山）音階をうたう練習。前列に男子、後列に女子が座る（平成23年2月5日19:01撮影）



稽古（諫鼓山）女子が太鼓を叩くこともある（平成23年1月23日20:25撮影）



稽古（月宮殿）指導者の後ろで指使いを覚える（平成23年3月12日19:08撮影）



稽古（青海山）若い衆がメロディーを口伝えで教える（平成23年2月13日19:19撮影）



大太鼓の台（諫鼓山）曳山に固定する留め具がある（平成23年1月30日19:21撮影）



稽古（高砂山）初心者と上級者が分かれて練習（平成23年3月12日19:07撮影）



稽古（青海山）若い衆が横に付き添って手と口伝えで太鼓を指導（平成23年2月13日20:31撮影）



すり鉦の持ち方（常磐山）5 指すべてを使い持つ（平成 23 年 2 月 19 日 20:33 撮影）



稽古（常磐山）指導者が子どもたちと対面して吹く（平成 23 年 2 月 19 日 20:20 撮影）



休憩（翁山）トランプで遊ぶ（平成 23 年 2 月 13 日 19:58 撮影）



稽古（翁山）男女離れて 2 列で座る。座り方は自由（平成 23 年 2 月 12 日 19:33 撮影）



稽古（狸々丸）稽古で CD を利用する。太鼓の担当者の右横に音響機器がある（平成 23 年 3 月 12 日 20:27 撮影）



稽古（狸々丸）指使いを見せて指導（平成 23 年 3 月 12 日 20:17 撮影）



稽古（鳳凰山）女性が笛の指導に参加（平成 23 年 2 月 18 日 20:10 撮影）



休憩（鳳凰山）花札をしたり、体を動かしたりする（平成 23 年 2 月 18 日 19:53 撮影）



すり鉦の持ち方（壽山）中指と薬指を折り、ほかの指で支える（平成23年1月30日21:11撮影）



稽古（壽山）吹けない子の横で一緒に譜読みをする（左奥）（平成23年1月30日20:14撮影）



テスト（萬歳樓）1人ずつテストをおこなう（平成23年3月5日20:04撮影）



稽古（萬歳樓）譜面（フチョウ）を閉じてクチョウする（平成23年3月5日19:34撮影）



稽古（孔雀山）各自で自主練習をする（平成23年3月9日19:51撮影）



稽古（萬歳樓）太鼓を横に並べて練習（平成23年3月5日19:11撮影）



すり鉦とバチ（孔雀山）割れたものもある。バチは金属棒（上）とボルト（下）（平成23年3月9日19:46撮影）



稽古（孔雀山）机を囲んで練習（平成23年3月9日20:32撮影）